

甘
莓
総
集
編



CRIMSON COMICS



夏休み、映画をとるため合宿先に向かう真中たち。みんなとは遅れて合流することになった東条は一人で電車に乗るがその電車内で少年達に目をつけられてしまう。少年達は車内でさんさん東条を弄び、さらに合宿所にまで侵入。トイレで手錠で拘束されしゃぶらされ、犯され、中に出される西野。風呂場の脱衣所で吊るされアソコとアナルに指を同時に入れてイカされ最後には二穴同時に挿入されるさつき。そして最後には東条も…。

同人誌「赤い果実」「甘い果実」と描きおろし30枚+小説32頁完結編収録。これまで発行したいちと同人誌のダイジェストも収録。

18歳未満の方は購入できません

赤い果実

最終話
「熟」



「見てろ。オレが女の身体のコントロールの仕方を見せてやる」

少年はさつきのヴァギナとアヌスへ同時に指を伸ばした。さつきの横合いからの行為はやりやすさからただけではなく、万が一にも蹴られないようにとの考えからだろう。

もつとも、すぐに抵抗などしなくなる。少年はそう考えて笑った。自分の指戯に自信を持っているのがうかがえる。さつきはそれを身体で思い知った。

「アナルとヴァギナの2本挿しにしてやる！」

熱く潤ったヴァギナへは簡単に侵入を許してしまった。

しかしアヌスはさすがに抵抗感が強い。そこはもともと排泄するための器官で外部から挿入されるべき場所ではないのだ。

「あ……あああああああ！！」

ふたつの穴を同時に犯されたという衝撃が脳天を貫く。あられもない声をあげたさつきに、少年は強い満足感を得た。

そしてその喜びを、指で表す。まずはより深くまで指を突き入れたかと思うと、あっさりと引き抜く。そしてまたすぐに突き込む。ペニスでの抽送を模しているのだ。

突き入れる度に深くなっていく挿入に、また声高に喘ぐ。

その衝撃と快感で、悲鳴にもついに艶が乗ってしまう。

「2本刺しの感触はどうだい？ 気持ちよくなって、頭がおかしくなりそうだろうか？」

確かにおかしくなりそうだった。

まだ誰の侵入も許していない臆に見知らぬ少年の指が入っているというだけでも怒りが爆発しそうなのに、その指からもたらされるのは間違いない快感。そのギャップがさつきの心までも犯していく。

お尻に埋め込まれた指の方はさらに強い嫌悪感があった。排泄感をとまなうところがまた嫌気をさすのに、こちらからも鈍い官能が湧き上がってくる。先ほどほぐされていたせいで、挿入自体も意外とすんなりといったところがまた嫌だった。

「こんなこと、絶対に許せない。なんとか逃げ出して、たたきのめしてやるんだから！」

まだ快感よりも嫌悪が勝っているせいで、理性的な思考が持てているさつき。しかしこのまま犯され続けられればどうなるか分からない。現に、ヴァギナに押し込まれた指から与えられる感覚は、早くも嫌悪から快感に変わりつつあった。



「おっぱい揉まれて感じちゃってたんだね。おま○この中、もう熱々だよ」

「くっ……そんなことないわよ……んんっ……！」

まずは膣から重点的に攻めることを決めたようだ。

少年の中指と薬指がまだ未開発の膣道を荒らし回る。

「くうっ！ や、やめてっ、やめなさいよ！ いい気になるんじゃないわよ……！」

「そんなよがり顔ですごまれてもなあ。姉ちゃんこそ、素直になっちゃった方がいいんじゃないの？」

「馬鹿なこと言わないでよ……っあああああ！」

また指の出し入れを始めた。

最初は荒く、次第にゆっくりとしていく。止まるほどゆっくりになり、終わりなのかと思わせておいてまた強く突き込む。

手のひらで土手を叩くかのようにする指挿入に、さつきは甘い痛みと官能を覚えてしまう。

指は膣内、そして手のひらでクリトリスを觸っているのだ。緩急自在のその指戯には、なるほど少年の自信が現れていた。

「こいつ、手慣れてる……このままじゃ、あんまり長くもたない」

今はまだ指で弄られているだけだからマシだ。でもこれがペニスだったら？

はじめては真中に挿げると決めているのだ。こんな見知らぬ強姦魔ごときに処女を奪われてしまったら、心が折れてしまいかねない。

「ふふっ。愛液も垂れ流れてきてるね。身体は正直ってやつだ、はははっ」

悔しさと、湧き上がる快感に歯を食いしばる。

少年の指は的確に快感スポットを探り当て、さつきを墮とそうと攻め立ててくる。

手のひらを土手に押し付けたまま、中の指を蠢かせる。その指先がちょうどクリトリスの裏側あたりを撫でつけた瞬間、さつきの身体は意志とは関係なく跳ね上がった。

「んあっっ！？ なに？ そ、そこは……っ！？」

「へえ、ここが気持ちいいんだ？ それじゃ、もっど……」

まるでヴァギナ全体をすくい上げるかのような形を取る。

手のひらでクリトリスを揉み込み、膣内の指が体内の側からクリトリスを押さえ込む。その押さえ込んだ場所、膣内のちょうどクリトリスの裏側あたりに、さつきのGスポットがあった。

少年はそれを分かっているのだろう。ニヤニヤと薄笑いを浮かべながら、重点的に膣内を撫で擦る。

一方、さつきにそんな知識はない。寝まじい快感が全身を痺れさせ、跳ね上がらせるのを受け入れるしかない。そしてそれは、心までをも痺れさせ始めた。

「あああ、駄目っ、そこ駄目っ！ いやあつ、ああ、んんあああつ！」

「駄目、じゃないよ。気持ちいい、でしょ？ 素直になりなつて」

「違つ、あつ……違つ。あたしは、こんなコトで気持ちよくなつて……あああ」

かろうじて抵抗するも、この痺れが快感であることは身体が理解していた。

クリトリスや膣が反応するだけでなく、乳首がかたく尖つていくのも分かる。そして、アヌスに潜り込んでいる指の感覚まで、官能に染まり始めているのが分かった。

「ああ、そうだね。そろそろお尻の方も可愛がつてあげないと」

「え……！？」

「お尻の入り口がヒクヒクして、もつともつと掻き回してくれつてお願いしてるよ」

「あ……ち、違つ。あたしはそんな……んつくうううううう！」

クリトリスとGスポットは押さえ込んだまま、今度はアヌスへの指挿入を再開した。

ヴァギナと違って愛液で濡れることのないアヌス。しかし少年は慣れた手つきで、ヴァギナからしたたり落ちる愛液をお尻の方へと垂れ流した。

潤滑剤さえあれば、アヌスへの挿入もたやすい。肛門の締めりはヴァギナとは比べものにならないところが心地好い。少年は楽しそうに、さつきの排泄口をもてあそぶ。

「いや。なによこれ！ お尻なんか指突つ込まれて、あたし、なんて声を出してるの！？」

肛門が押し広げられる感覚に悶える。直腸内壁を擦られる感覚にとまどう。

膣とはまた違った挿入感。張りのある肛門をほじり、ねじ込まれる指の感覚は、単に肉体的快感だけではなく精神的なものが強かった。

それは汚い場所を弄られているのだという背徳感。

そんな場所を他人に弄られるなど考えたこともなかったさつきの女性的な潔癖性が、快感に背徳感を混ぜ合わせた激しい感情を生み出していた。

お尻もいい感じに
ほぐれてきたね

ほひ
こっちにも指2本
入っちゃうんじゃないの？

やめっ……
そ、そんなことしたら
お尻がっ……

ほ

ぬる

ふふ
いいねえその顔

もう堕ちる寸前って
感じだよ

クッ

腕を縛られ、半分吊り下げられるような状態になっていれば、蹴りで抵抗するしかない。1人はそれで上手くやれたが、もう1人は分かり切った様子で足の攻撃範囲から逃れている。

そもそも、股間の穴ふたつを弄られていては、蹴りなど出せるはずもないのだが。

(駄目。足を閉じても中の指は動きまくるし、足を緩めたらまた出し入れされちゃうし……これじゃあ、もう気持ちよくされるしかないじゃない！)

嫌なだけだったはずのお尻ですら、快感を生み出す器官になってしまっている。

このままふたつの穴をいじられ続ければ、自分がどうなってしまうのか予想もつかない。

「どっちの穴もキンキン締め付けてくるね。もう、指だけじゃ足りないのかな？」

「な、なにを言ってる……っつ……？」

少年と目があつた。

それは欲情に燃え盛った、ケダモノの目だと分かってしまった。

「待って。まだ早いよ」

顔を蹴られた少年がようやく立ち上がった。まだ痛みが引ききつていないのか、鼻頭をさすっている。

「蹴ってくれたお礼をしなくちゃな」

「おいおい、あんまり乱暴なことするなよ？」

縛り付けておいてどの口で言うのかと、また怒りが湧くさつき。

しかし怒鳴り散らしても、少年たちはまったく意に介してはいなかった。

立ち上がった少年は、2本挿しの少年とは逆側に立ち、激しく胸を揉み始める。

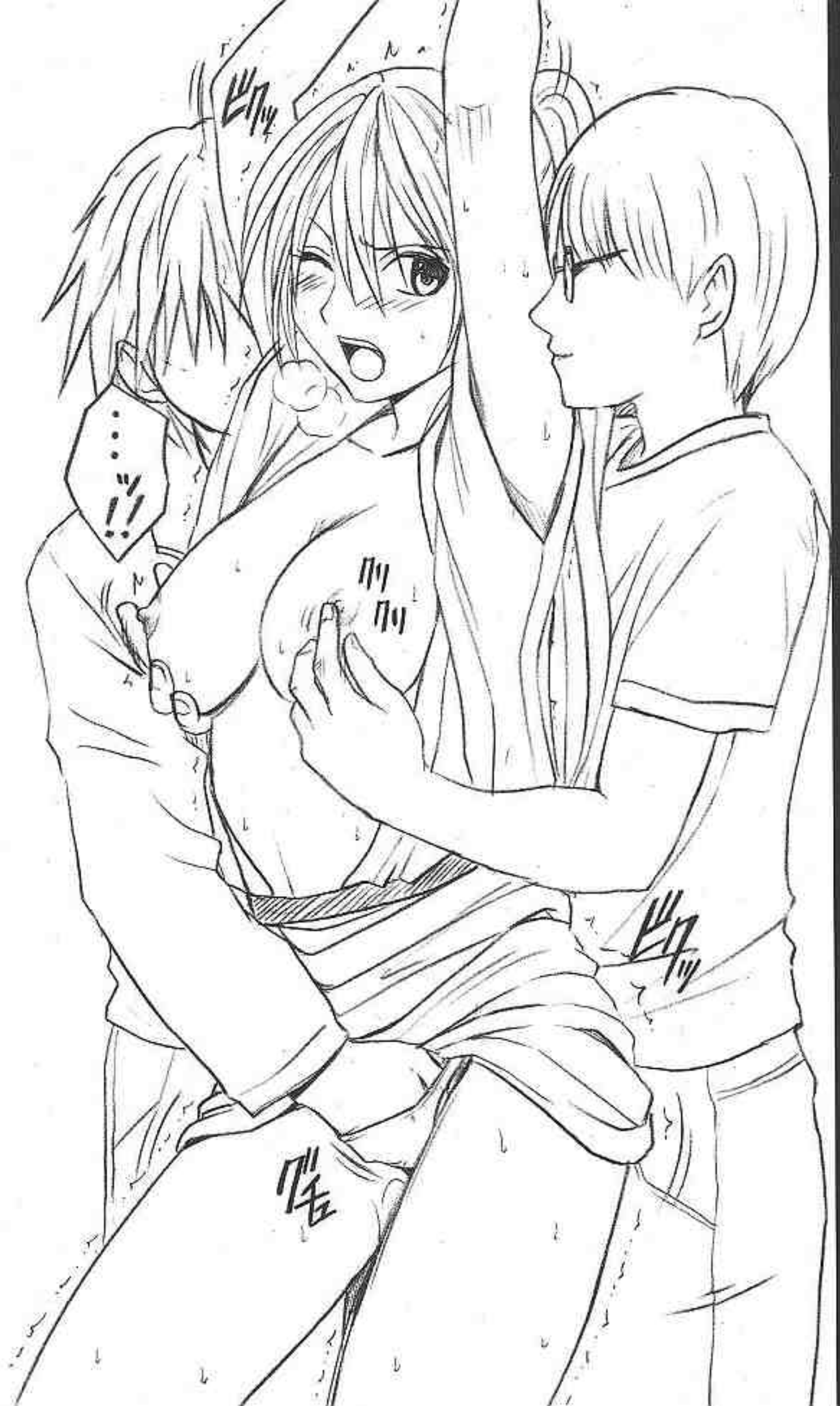
「くっ……は、放して！ また蹴りたいの……？」

「ははは、やれるもんならやってみなよ」

立ち位置の問題だけではなく、アヌスとヴァギナを愛撫されたままのさつきではどうしても少年を蹴ることができない。

その上、胸まで愛撫されてしまつては、もう全身から快感を生み出される以外にない。

(駄目だ。これでまたオツパイまで弄られたら……)



横合いから揉み込まれる。

全体を握ったり、乳首をつまんでもあそぶ。重さを確かめるように下から手のひらでたわませると、いやらしい笑みが溢れ出した。

「すげえ質感。これはたまらないね……お姉さん、肩こりすごいでしょ」

「あ、あんたにそんなこと関係ないでしょ!？」

凶星を指され、ついうろたえてしまう。別に大したことを言われたわけでもないのに、心の奥底を見透かされたような気になってしまった。

それを悟られたらしい。少年は余裕の表情で、乳房をこねくり回す。

そしてまた、先ほどと同じように乳首に吸い付いた。

「へへ、この乳首のコリコリ感がいいんだよな。勃起してるしさあ」

少年は自分の手前側の乳首に吸い付きながら、奥の乳房を揉みほぐす。

左右異なった官能を与えられるさつきの口からは、怒声ではなく喘ぎが漏れる。

「やめっ、あつ、やめて! 嘔み付かないでよ……ああんっ!」

ねっとりとした舌で、乳輪を舐め回される。意志とは関係なく乳首はそそり立ち、少年の舌先に快感を与えていた。

少年はそれに吸い付き、まずは軽く甘噛みする。唇で噛み、歯でも噛む。歯で噛む時はほんの少しだけ強くするのだ。噛み切られてしまうのではないかという恐怖感がさつきの身体を強ばらせる。息を呑む、その仕種や表情に、少年は深い満足感を得ていた。

「感じやすいんだね、お姉さん。乳首、勃起させすぎだよ」
「違っ、そんなんじゃないわよ……っく!」

あまりに迫力のない抗議に、少年たちは苦笑した。

そして攻撃欲を刺激してしまったのか、更に激しく愛撫にかか

る。
「ああっ、いやっ……んんっくううううう!」

乳首へのパキニームが力を増した。母乳を吸い取ろうかというほどに強く吸われ、甘い痛みがさつきの官能を刺激する。

乳房にあたる鼻息がまたこそばゆく、激しさと軽さ、二重の快感に心までくすぐられるのが分かった。



もちろん、揉み込まれている方の乳房からも、止めどない官能が湧き上がってくる。

乳房への愛撫は、まるで甘噛みするかのような感覚。指の腹で擦ったかと思えば、唐突に爪を立ててくる。しかし痛みを感じる前に放され、またこりこりと転がされた。

乳首ばかり弄るのかと思えば、乳房全体を揉み込んでくる。持ち上げたり、掴んで引つ張ったり、こねくり回したり。少年の指戯には限界がないようにさえ思えてしまう。

(ああ、いや……どうして、胸でこんなに感じちゃうのよ……！)

あらゆる手法で乳房をもてあそばされ、さつきは目まいを覚えていた。乳房は、こんなにも感じやすかったらうかとも。

そして無理矢理されているのに感じてしまっている自分に憎しみさえ覚えてしまう。不意に、感じているのは自分ではない他の誰かなのではないかという気持ちさえ浮かんでしまった。

「だいぶ素直になってきたみたいだね。どうだい？ そろそろ欲しくなってきたんじゃないの？」

「欲しい？ なにを言ってる……あああつ！」

一瞬、なにを言われたのか分からなかった。しかし少年の指戯で、なにかもを悟る。

膣と直腸に潜り込んだ指。それを出し入れされて、グッチョグツチョと水音が響いた。本来、そこに入るものは指などではないのだ。

「いつ、いやよ！ なに言ってるの！？ そんなコトしたら承知しないだから！」

「あれれ？ まだ素直になれないんだ？ 意外と強情なんだね、お姉さん」

言いながら、少年がポケットから小さな球のような物を取り出した。

「なによそれ！ な、なににするの！？」

眼鏡の少年は乳房への愛撫をやめ、その球体をさつきの股間へ、クリトリスへと押し当てる。

「お姉さんが、もっと素直になれる小道具だよ」

そして、スイッチが入った。

球体は、低い強い振動を起こしてクリトリスを痺れさせる。

「なつ！？ 何これっ！ しつ、痺れちゃうっ……んつくううう！」

これ駄目！身体が勝手に反応しちゃっ！

気持ちよすぎるわーおかしくなっちゃっ！



機械的な振動は、鮮烈な刺激をさつきの体内にもたらした。これまでの指戯だけでは得られなかった鋭い快感。それは新たな官能を湧き上がらせる。

まるで全身にある快感スポットを針で刺されているかのようなだった。痛みではない。しかしあまりにも強い快感は、痛みにも似た衝撃をもたらした。

「おおお、締まる締まる！ やっぱクリトリスは効くみたいだな」

臆をもてあそんでいた少年が笑った。臆口と肛門が、クリトリス性感で引き締まったのだ。

さつきにもそのことは分かった。熱く潤っていたクレヴアスが、また始めの頃の締まりを取り戻す。それは、少年の指の感触をまた明確にさせた。

さつきは、もうだいたいぶ理性を失っていた。逃げ出そう、少年たちを懲らしめようという気持ちよりも、この後はなにをされるのだろうかという期待と不安にとまどっている。

すでに、少年たちを蹴り倒して逃げ出そうという考えはなく、攻撃性は性的な感受性に置き換わっている。

「どう？ これキクでしょー？ 素直になれば、もっと気持ちいいこともしてあげるよ？」

「も、もっと……っ」

聞くもでもないことを、つい聞いてしまう。

そして自分がしばらく喘ぎ声しか出していなかったことに気がついた。

「ば、馬鹿なこと、言わないで……そんなの、絶対許さない……わよ」

少年たちは抗議せず、ただニヤニヤとした笑いを見せつけた。

もちろん、その間も手の動きを止めることはない。臆や直腸をほじる指もそうだが、ローターを持つ少年の方も、ただ陰核に押し付けてくるだけではなかった。

さつきは知らないことだったが、ローターには振動パワーの強弱を付けるスイッチがあった。

「きゃあっ！？ し、痺れが強くなっ……あああああああああああああ！？」

瞬間的に、頭の中が真っ白になった。

叫び声に乗って、理性が飛んでいくのが分かる。

「お、いい顔だね。そろそろ一回、イットこうか」

膣内と直腸内の指を、鍵状に曲げた。

膣はまたGスポットを、直腸の方もなにか似たようなスポットがあるのか、どこかへ引つ張られるような感覚がさつきを襲う。

少年は、鍵状に曲げた指でさつきのふたつの穴を開くかのよう
に左右へと引つ張った。もちろんふたつの穴が開ききるようなこ
となどない。瑞々しい弾力に満ちたさつきの女性器と排泄器官
は、少年の行為にも負けない張りを持っていた。

「駄目っ、ダメエ！ 引つ張ったら裂けちゃうっ、おま○こがつ、あ
あ、おっ、お尻もっ……裂けちゃうよおお！！」

「平気平気っ！ ほら、こんなにとろけて、気持ちよがってるんだ
からさー」

ただ引つ張るだけではなく、体内の指を暴れ回らせる。2本の
指を交互に動かし、わざと水音を響かせた。

まるでピアノを弾くかのような指さばきには、さつきは悲鳴とい
う名の音色を奏でる。

もつとも、その悲鳴には淫らな艶が乗っているのだが。

（いや。なにこれ？ なにか来る。子宮あたりから、なにか迫り
上がってくる……）

「これまでに感じたことのない衝撃が体の中に生まれつつあった。

クリトリスの痺れ、膣内で暴れてる指、お尻の中を掻き回す指。
少年たちの目、笑い声、体温、その熱さが、さつきの中に初めて
の情動を発生させた。

「いやっ、いやあー！ くるっ、来ちゃうっ……来ちゃうっ……
ううう……」

身体中に電撃が走り、頭の中でスパークした。

目の前が真っ白になり、ひとつだけを残してあらゆる感情が掻
き消える。

快感という感情以外、すべてが電撃に消されてしまう。

「ひっ、あっ……きゃあああああああああああああ！！」

絶頂を迎えた。

肺の空気がすべて嬌声となって絞り出される。しかし、さつき
はもう自分がどんな声をあげているのかも分かっていなかった。

身体中が張り詰め、全身が快感を生み出す器官になったかの
ような錯覚に襲われる。

まだ膣内で暴れ回っている指は、腹を割き、内臓を弄っているの
かと思えた。尻にめり込んだままの指など、そのまま串刺しに
されて口から出てきてしまうかとも。

「これって、もしかして絶頂っていうやつ？ あたし、こいつらにイカされたの？」

どこか遠いところで考えているような気がした。

自分の身体を客観的に見ているかのような感覚。

さつきは絶頂の疲労でがっくりとうなだれ、今にも息絶えんばかりの息を吐いた。

「いやあ、ずいぶんとハテにイっちゃったねえ」

少年たちは元気いっぱいできつきの身体をまさぐり続ける。

しかしさつきは、初めての絶頂感に疲弊しなくなり、答える気力すら湧かなかった。

「なんだよ。自分ばかり気持ちよくなって、もう俺らのことはどうでもいいワケ？」

「そりゃあ、フェラじゃないよね、お姉さん？」

ふと気がつけば、少年たちの声にもかなりの熱がこもっていた。

まだ茶化すような感じが強いが、息を吞んだりしているのが分かる。

そして、少年たちはズボンを脱いで、そそり立った。ペニスをさつきの眼前に剥き出した。

「まずは、そのお口で」奉仕してよ。嘔んだりしたら、怒っちゃうからね？」

「そんな……そんなこと……」

少年たちの望みは分かった。ペニスを口で愛撫してもらいたいのだ。

フェラチオ。もちろんさつきにはその経験がない。見知らぬ少年のペニスを見ることさえもはじめてだ。

しかし何故だろう。嫌悪感はあるのだが、それを舐めてみたいという欲求もあった。どうすれば少年たちが気持ちよくなるのかも、本能的に分かっていた。

（信じられない。あたしがこんな……真中以外の男のおち○ち○を見て……こんな気持ちになるなんて）

先ほどの絶頂が、さつきの中の女の性欲を目覚めさせたのか。見知らぬペニスに対して、嫌悪感よりも性的興奮の方が湧き上がっている。

「ほらほら、ち○ち欲しいんだろ？ 気持ちよくしてくれたら、またさつきみたいに凄い味わわせてやるからさあ」
「さつき、みたいな……こくん……で、でも……」

待ちきれなくなったのか、少年が腰を突き出した。
さつきの唇を割って、初めての物体が口内へと侵入してくる。

「んむっ、じゅっ……ちゅぶぶっ、んぶっ！」

「おおお！ やっぱフェラ最高くっ！」

舌を使うことなどできもしない。とにかく噛まないようにしなければという考えだけが、さつきの初めてのフェラへの感想だった。

少年は恐れることもなく、腰を突き出す。生意気な女の口腔を犯しているのだという優越感に、舌なめずりさえしそうな勢いだっただ。

「ほらほら、もっと口をすぼめてさ。ち〇こを口の中全体で包み込むんだよ」

「んうっ、ぶっ……んっちゅ、じゅぶっじゅぶっ……ううう！」

息苦しくて涙目になった。それを嗜虐的だと思ったのか、少年の腰が激しく突き出される。

口内を蹂躪し、喉を突く。ペニス。その苦しさにもまた涙が浮かぶ。しかし何故だろう。さつきは抵抗しようとは思わなかった。

まるで口が性器になったかのよう。熱いペニスが口腔を擦りつける感覚は、先ほど膣内を二回回されていた時と同じように思え

る。敏感な粘膜を異物が擦っているという意味では同じだが、入れられている場所も、入れられている物も違うのに。

（なによこれ……なんでこんなに気持ちがいいの？）

絶頂した時、全身が性感帯になったような気がした。その名残なのだろうか。

男性がフェラチオで性的興奮を得ることくらい、知識としては持っていた。いつか真中の熱いペニスをしゃぶりたいとは思っていたが、まさか犯されているのに感じてしまうなどとは思ってもよらなかった。

そう。今、口腔を犯されているのだ。

改めてそれに気づき、さつきは被虐的な官能に全身を痺れさせてしまった。

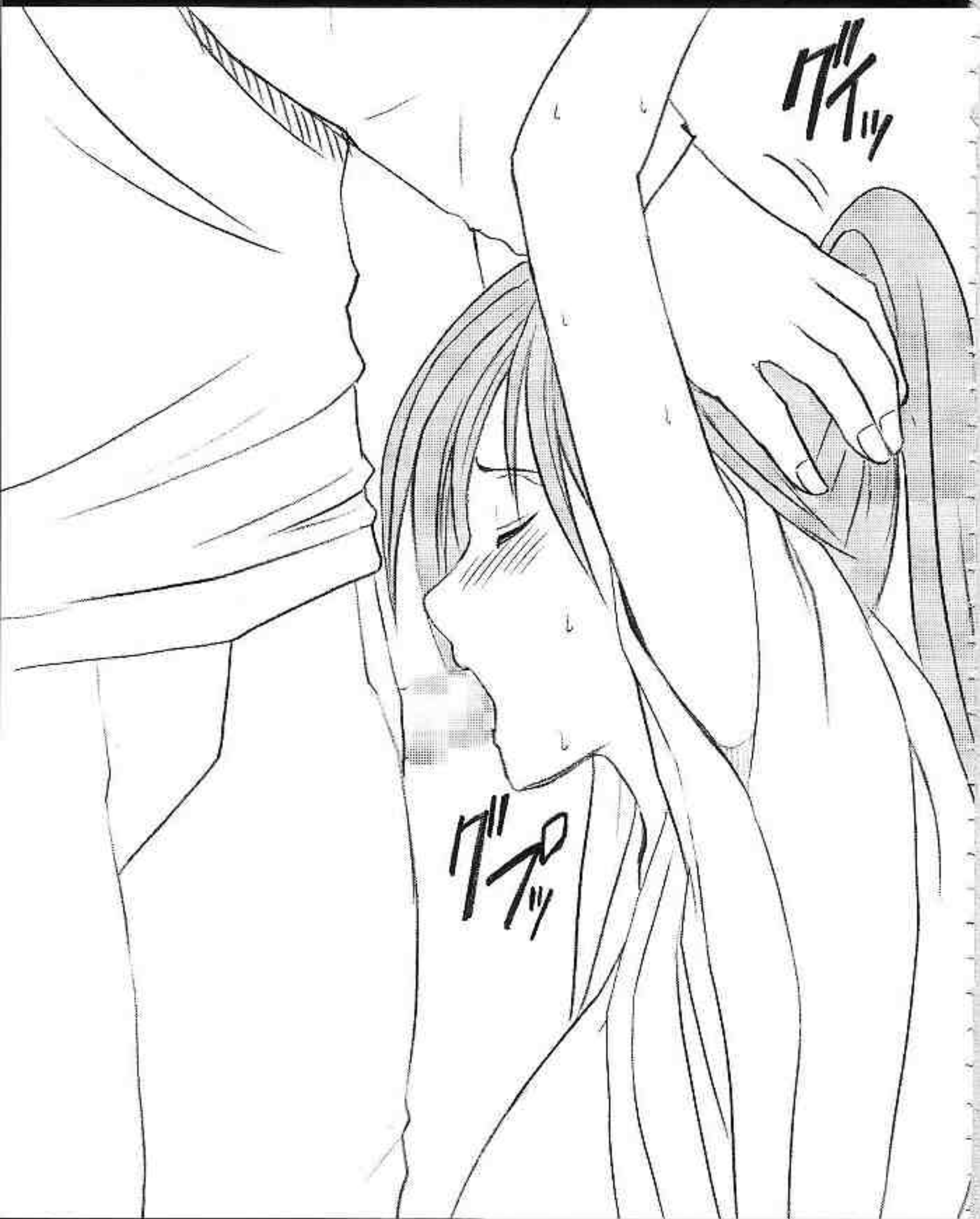
「はじめてなのに、なかなか上手じゃないか。これじゃ、すぐに出ちやいそうだよ」

精液のことを言ってるのだとは分かる。

しかし、それがどんな味なのか、どんな感触なのかは知らない。

「待てよ、ちよっともつたいなくねえ？」

「いや、でもさ。この姉ちゃん、口、すげえんだって」



少しすすめるように口をすぼめて、ペニスを包む道のような物を作る。舌を丸めて突き出すようにしてやると、少年は嬉しそうに喘いで腰を突き出した。

「なんだよ。それじゃ、ちよつと俺にも味見させてくれよ」

少年は渋々ながらも交替した。

口から抜け出るときのペニスの感覚がまた心地よく、さつきはブルツと腰を振るわせる。

そして、まるで愛液のように唾液を垂れ流し、もう1人の少年のペニスを啜え込んだ。

「んおっ！舌がつ、舌がつ！」

先ほどの少年のよりも少し短い気がした。しかし、その分太い。

少年は無理な抽送はせず、ただ奥まで押し込める。さつきは苦しきから解放されたので、舌を動かす余裕ができた。

「れる、べろんっ……んっ、ちゆるっ。れるれる、じゅっ……ちゅぶっ」

少年の腰がカクカクと震えた。よほど気持ちいいのだろう。さつきは少し嬉しくなって、舌を暴れ回らせる。

亀頭のくびれた部分は唇で甘噛みするのにちよつと良かった。舌先に尿道口の割れ目が当たり、そこをくすぐってやると少年の口から歓喜の悲鳴が溢れ出す。

そして舌も唇を動かし、すすめるようにして、ペニスを呑み込んでいく。

亀頭を上あごに擦りつけながら、幹の下部に舌を這わせた。唾液を絡ませて、時に強く時にゆるくすすり上げると、少年の腰は大きく震えだした。

「や、やべっ！我慢できないよこれっ！」

「ははは、もったいないんじゃないのかよ？」

耐えきれなくなったのか、少年も腰を前後させ始める。太くこつい。ペニスがさつきの口腔を暴れ擦った。

張り出た亀頭のエラが頬を擦る感覚がいい。あまり長くないおかげで喉を突いてこないところも、苦しくなくて良かった。

「あ……なんだか、潮臭くなってきたかも……」

大量の先走りが出ているようだった。生臭いような、芳しいような、不思議な匂いが口腔から鼻腔までを満たしていく。

もう少しで射精されるのだろう。さつきは期待と不安を入り交じらせた。

少年の抽送スピードが上がリ、口の中でグツチャグチャと淫らかな音をたてまくる。その響きが頭の髄まで浸透し、さつきの理性を奪っていく。

体も心も、すべてが性欲に染められるまで、もうほんの少しだった。

口内で射精されれば、自分は完全に堕ちるだろう。心のほんの片隅にまだ抵抗したいという気持ちも残ってはいるのだが、今はもう射精を体感したいという気持ちの方が勝っている。

口の中に出されれば、その味も匂いもすべて感じる。ことができ。舌触りも、喉を通っていく感覚までもすべて。

(早く……ああ、早く射精して……精液、ちようだいよ！)

心までもが犯された。

さつき自身、もうそんなことはどうでも良くなっていた。

「お、おとおおっ！ くっ……」

「え……っ」

しかし、さつきの願いは叶えられなかった。

「……なんで？ 射精、しないの？」

呟くさつきに、少年たちはそそり立った。ペニスを見せつける。それはさつきの唾液にまみれ、先端からは透明な汁をしたたらせている。アレが匂いの元だったのだろうかと思つて息を呑んだ。

「ねえ、なんで？ もういいの？」

「いや？ 姉ちゃんも、どうせなら口の中より他のところに出してもらいたいんじゃないかと思つてさ」

にやけ顔には、激しい欲情が込められていた。

少年も射精を我慢しているのだと思つと、さつきはまた強く息を呑む。

「ねえ、どこに出してもらいたい？ お姉さんの言葉で聞かせてよ」

口、と言えは口に出すのだろうか。

いや。それならもう、すでに出しているに違いないのだ。

「俺たちもさ、姉ちゃんのお願いを聞いてあげようと思うんだ」

「だからさ、言つてみなよ。どこに俺たちの精液を注ぎ込んでもらいたいのか、ハッキリと言つてみなよ！」

少年たちは試しているのだ。

さつきが自ら一線を越えるかどうか。

きつと、抵抗しても無駄なのだろう。なにを言おうが、少年たちは蹂躪するのだ。

「お……」

無理矢理されるのと、同意の上でされるのと、どれほどの違いがあるのだろうか。

すでに官能の虜になってしまっている自分が、どれほど抵抗できるといえるのだろうか。

「おま○こに……」

もう、いいのだ。

自分もセックスを堪能したいと思っているのだから。

「おま○この中にください……おま○このなかで、いっぱい射精してくださいっ！」

さつきは、自分が完全に堕ちたことを理解した。

腕を縛り上げられたままの状態、脚をM字に開かされる。

そして少年は、そのままの体勢で腰を突き上げた。

「あ、あああつ……入るっ、入ってくるっ……っっっ！」

破瓜の傷みはない。それどころか、待ちに待っていた最高の快感が流れ込んできた。

指のように硬く、荒々しいものではなく、適度な張り熱さを持ったペニスは、まさに膣へと挿入すべきものだと分かる。口もいが、やはり快感のレベルが違った。

めりめりと膣壁をこじ開けながら侵入してくる感覚は、身を切り裂かれていくかのようなマゾヒスティックな快感。体内に異物が押し込まれていく圧迫感もまた、虐げられる感じがして良かった。

そしてその熱い塊が、膣の奥壁へとぶち当たる。子宮口だった。お腹の中で、ズン、と響く。胃を押し潰されるかのような感覚はやはり、凄まじい圧迫感。それがすべて快感なのだ。さつきは息を止めて、そのすべてを堪能する。息を吐いてしまっただけは、快感が逃げてしまうのではないかとさえ思った。

「んっく、ふ……んはあああつ、はあ、はあ、はあつ！」

「いいぜ、姉ちゃん。最高のま○こだ……っくう！」

ペニス全体を膣へと押し込んで、少年が笑った。

さつきも、自分の体内で少年が熱く脈打つのを感じて微笑んでしまう。



あああ
あああ
あああ

あ
あ

それを見た少年は更に笑いを深くして、舌なめずりをした。それはもう、笑いというよりは凶暴なオス犬が獲物を捕らえたときの表情だった。

（ああ、あたし犯されてる……知らない男のち○ぽ、初めてのおま○こに押し込まれてるんだ）

そんな風に考えると、背筋がひどく痺れた。官能の甘い痺れ。その上、膣道には熱いペニスが収まっているのだ。性感を覚えないはずがない。

しかも、こんな体勢だ。突き上げられたペニスで子宮を圧迫され、股間同士が擦れ合ってクリトリスまで押し潰されている。少年が少し腰を動かすだけでそれらも擦れ、これまでに感じたことのない官能が全身に伝わる。

「くうっ、締まる締まるっ……姉ちゃん、良すぎだぜー?」

「し、知らないわよ、そんなの……んっ、あたしだって、良すぎて……あああ!」

ただ押し込んでいるだけではもう耐えられなくなったのか。少年がさつきの身体を上下に揺すり始めた。

「それ駄目! ふっ、深いっ、奥まで、来すぎちゃうっ……っ!」

股間を押し当て、打ち上げる。重力を使った抽送は、少年にとってもさつきにとってもかなりの激しさを生みだしていた。

少年は力任せで上下させているので、体力の消費が激しい。それでも、目の前でユサユサと震える乳房を見るのは至福であった。もちろん、膣圧もたまらなく心地好く、亀頭に当たる子宮の壁から、気が遠くなるような快感を受ける。

それはもちろん、さつきにとっても凄まじい快感だった。

まるでペニスが子宮にまで入り込んでくるかのように攻撃的な打ち込み。子宮だけではなく内臓すべてが圧迫され、上に押し上げられているような感覚に陥る。

「いや、いやあ! 串刺しになっちゃうっ、おま○こ、突き抜かれちゃうよおっ!」

そんなはずはないと分かっているても、膣を貫くペニスが子宮まで貫くのではないかという恐怖感は、理性とは違うところから生み出された。

恐怖が緊張になり、緊張が膣圧を高めていく。結果として、ただでさえ狭いさつきの膣道が更に圧力を増し、少年のペニスに快感を与える。少年はそれが嬉しくて、更に強くさつきの身体を揺すっていく。

しかし、こんな力任せの技は長続きしない。少年は荒い息を吐いて、さつきの身体を抱き留めた。



あー!!

あー!!

ちゅ

ちゅ

「はあ、はあ、はあ……ああ、こ、壊れちゃう。おま○こ、壊れちゃううう……んんう」

「あー、やべえ。こんなに早く出しちゃったら、もったいなすぎだぜ」

小休止。しかし、少年はさつきへの愛撫を止めなかった。

腰の動きは抑えるが、眼前にあった乳房へと舌を伸ばす。そそり立った乳首は噛み付くのちようと良く、コリコリとした歯触りがお互いの性欲をそそった。

「あんっ、んんっ……おっばい、駄目え……あんっ、くう！」

悶える度に締まる膣に少年も思わず悶えてしまう。じつとじていても、こうしてちよつと愛撫するだけでさつきの膣は締めまり、そしてうねる。

まだ未開発の膣壁が快感を求めてうごめき、少年の射精欲を徐々に高めていく。

「おおおお……これ、すげえ名器だよ……」

「だったら、とつとと替われよ。俺だって早くやりてえんだからよ」

感嘆の吐息を漏らす少年に、余ったもう1人の方が不満の声

をあげる。

しかし、ふとなにかに気付いたかのように笑みを漏らす。そしてさつきの背後へと回り、桃のような尻肉を掻き分けた。

「……え？ なに？」

「どうせなら、3人一緒に楽しもうと思つてさ！」

「そりゃいや。来いよ」

膣を犯している少年の方はすぐに気がついた。しかし、さつきは少年たちがなにをしようとしているのか、まったく分からなかった。

後ろに回った少年が尻肉を掻き分け、その谷間にある小さなつぼみに亀頭を押し当てても、なにが起きるのか想像もつかなかった。

最初に、そこにも指を入れられていたことを忘れていた。

「アナルヴァージンは、俺がもらうことにするよ！」

「え……っつ！？」

ゴリツ、という感触があった。

それはすぐに官能的な圧迫感へと変わる。

「え、う、うそ！？ お尻におち○ち○入れてる！？」



しばし忘れていた、排泄感をともなう官能がさつきの脳髓を満たした。それはひどく衝撃的で、あまりにも甘い官能。

すでに嫌悪感は無かったが、指よりも数倍は太いペニスがそんなところに入るだなどとは思ってもよらず、さつきは不安混じりの嬌声をあげた。

「ああ、いやっ！ うそっ、だ、駄目っ！ そんなところに、おち○ち○入れたら駄目よお……っくうっ！」

「平気平気……っくう。ちよつと変な感じするだろうけど、こっちだつてすぐに気持ちよくなるって」

「だ、だつてそこは汚い……んんっ、あんっ、ンン！ 駄目だつてばあ……あああ！」

しかし少年はさつきの懇願など聞く耳持たず、ペニスの根本までを強引にねじ込む。

意外とスムーズに挿入できたのは、もちろん愛液が潤滑剤になっているからだ。少年はその太いペニスにしっかりと愛液を絡めてから、さつきの肛門を穿っていた。

（ああ、こんなもの凄。凄すぎる……お腹の中で、おち○ち○が擦れてるのが分かつちやうっ！）

根本まで埋めたペニスが、さつきの体内でぶつかり合っていた。

膣と直腸は、薄皮一枚でしか隔たれていない。熱く脈打つ2本の剛直はその薄皮を擦り、ねじる。

今度こそ体内が破かれてしまうのではないかという不安がさつきを襲い、被虐的な快感がまた全身を駆けめぐった。凄まじい圧迫感なのだ。これでは本当に破けてしまう。心の中の悲鳴が、すべて快感へと変換された。

「あー、やっぱいいわ2本挿し。指でもち○こでも、最高気持ちいいぜ」

「そうだな。これぞ強姦って感じだよ……まあ、もうこのお姉さんつてば、上がり狂つちやつてるから強姦って気いしないけどな」

けらけらと笑う少年たちに、さつきは素直に同意した。もうこれ以上、なにを抵抗するというのか。自分ももう、本当に狂つてしまっているのかもしれない、そうまで思った。

そんなさつきに気をよくしたのか、アヌスを犯す少年が腰を揺らし始める。

いくら愛液をまぶしたからといっても、そこはやはり直腸。あまり滑りの良くないそこで抽送は、アナルセックスに慣れている少年であつても無茶は禁物らしい。まずはゆっくりと出し入れをして、肛門と直腸をほぐし始めた。

「んあ、ああああ……っ、これえ、変な、感じがあ……んあああ！」

膣にペニスが入ったまま、直腸の抽送を繰り返される快感は、さつきの想像をはるかに上回っていた。

ペニスがねつとりと腸壁を擦る。挿し込むときには圧迫感と、貫かれるという心的官能が湧き上がる。抜かれるときには、力リ頸が壁を引っ掻いていく快感と共に、切ない喪失感が襲いかかる。

膣とは似ているようで違う快感。アヌス性感は、鮮烈さではなくじんわりとのしかかるような鈍い官能なのだと思つた。

「こんなの、ガンガン突つ込まれたら壊れちゃう……今度こそ、あたしのエッチなところ全部壊されちゃうよお」

大きく震える。それはもう、恐怖や不安ではなくすべてが官能への期待からだつた。

あまりの快感に、さつき自身がもうゆつくりと出し入れされるのに飽き始めていた。自分でも気付かないうちに気を引き絞りに、肛門や膣口を締める。

吊された腕を自ら持ち上げ、下から突き上げられている体位を楽しむ。少年たちの声が、徐々に高くなっていくのを聞くのが嬉しかった。

「やべえ……俺、もうホント耐えられないかも」

「ちつ。お、俺も……くそ、良すぎるんだよ……このケツ、最高だ

よ」

さつきは満足げな吐息を漏らし、少年たちにささやいた。

「ねえ？ そろそろ、射精してくれてもいいんじゃないの？」

それが合図になった。

少年たちはキレたかのように歯を食いしばり、腰を高く突き上げる。

「ああ！ 来るっ、すごいっ！ 奥まで、奥まで来るううう！」

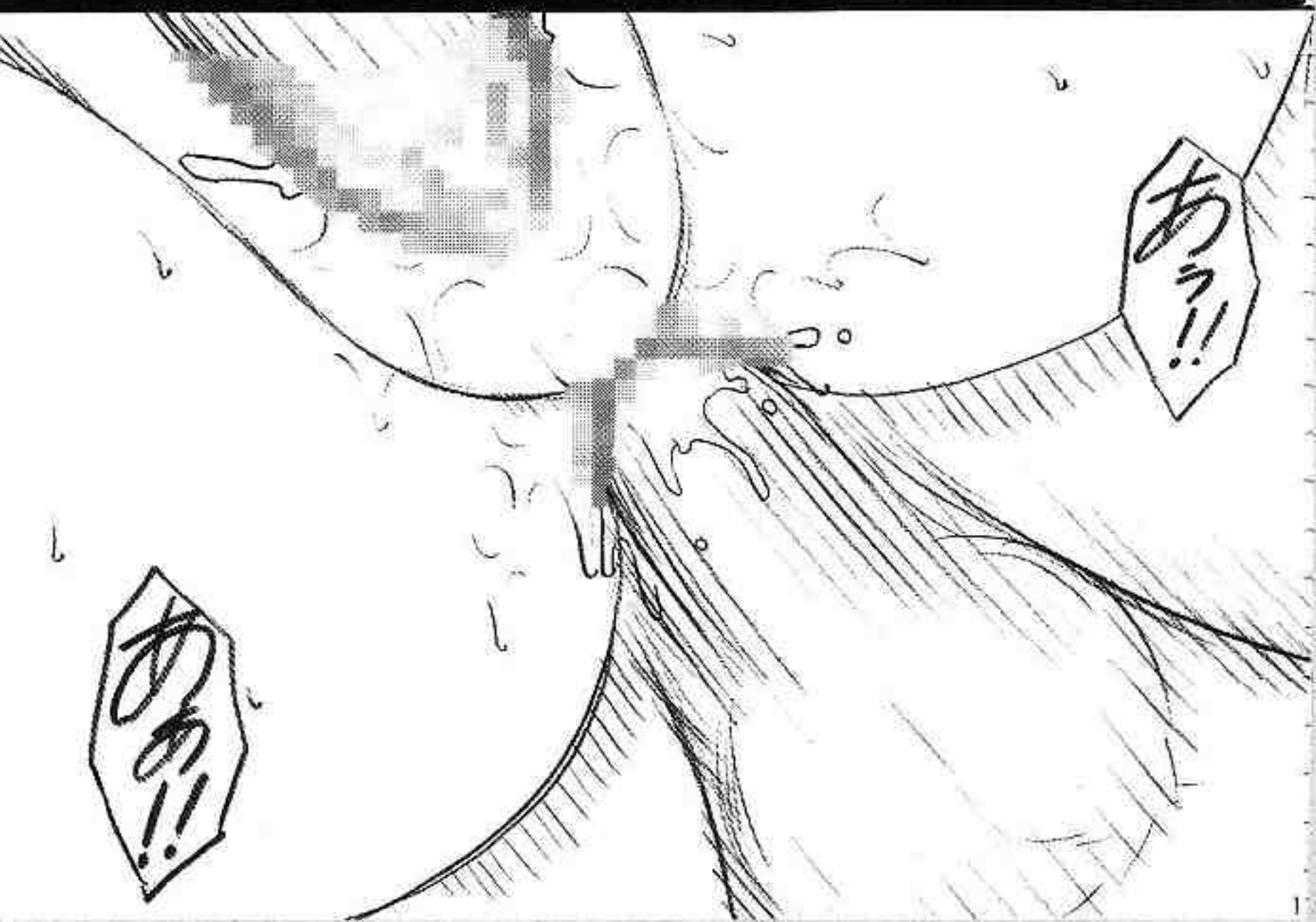
あまりにも淫らな悦びの声が、少年たちの理性を奪つた。

メチャクチャに突き上げると、さつきが苦しさでうめく。それがまたサディズムをおおるのか、乱暴さをいや増していく。

しかし、それでも少年たちは手慣れていた。突き込む順序もなにもでたらめだった抽送は、次第にリズムカナルなものになっていく。

膣へと挿入したときは尻の方が抜け、尻を穿てば膣側に戻る。何度か交互に出し入れして、その調子良さにさつきが快感の訴える。

しかし次の瞬間、膣と直腸、同時に最奥へとぶち込まれた。



それでもペニスの動きは止まらず、何度も何度も押し込まれた。

「あ……あああ……来てる……精液、いっぱい、すごくいっぱい……うー……」

これまでにないほど、ペニスが跳つていた。

それが射精の脈動とは知らないさつき。しかし、射精と同時のこの動きは、さつきの中の女をより一層高みへと誘う。

「あ——だめ、も、もう……オカシク、なって……」

息ができなくなっていた。

自分の身体なのに、思い通りに動かせない。

まるで体内で爆弾が弾けたかのように、何度も何度も跳ね回り、そして。



事切れるかのように、意識を失った……

少年たちは衣服の乱れも直し、立ち上がっていた。

その足下には、腕の縄をほどかれたさつきが転がっている。しかし、意識はないようだった。

「あの巨乳姉ちゃんとやる前の前菜にしては、なかなかのイキっぷりだったぜ」

「ま、いい準備運動になったんじゃないかね？ 一発出したくらいじゃ、まだまだ落ち着くわけもないしさ」

「そうだな。それじゃ、さつきとあいつらとも合流しようぜ」

少年たちは笑いながら脱衣所をあとにする。その床に転がしたままのさつきには、もはやなんの興味もそそられないようだった。

しかし、ドアから出る前に、ほんの少しだけ振り返る。

あられもない姿のさつき。その股間からは、大量の白濁液が溢れ出している。

「気持ちよかったぜ、姉ちゃん」

薄暗い廊下に、少年たちの笑い声が響き渡った。

……

落ち着こう。綾は何度も自分に言い聞かせていた。

そして寝てしまえばいい。眠ってしまえばすべて忘れられる。身体を襲ううずきも、朝になれば消えているだろう。

そう思つて、何度も目を閉じた。

しかしまぶたに浮かぶのは、電車での出来事だった。

(駄目……忘れられない)

女陰に塗られた物はすべてぬぐい取つたのだが、すでに染み込んでしまつているのだろう。火照つた感じまではぬぐい取ることができなかった。

膣の入り口に、なにか熱いものが入っているような感じ。それが愛液を潤す原因になつているのは分かる。股間が濡れている感じは、眠ろうと思つている身としては決して心地好いものではない。

すでに替えのパンツもなくなつた。

ずっとぬぐい続けるわけにもいかない。それを名目にして触り続けられ、また電車でのことを思い出してしまふ。

少年たちに、恥ずかしいところを触りまくられてしまったことを。

(あたし……いつちやつたんだ……)

呟いただけでも、愛液が湧き出すのが分かつた。

見知らぬ少年たちの指戯は、まだ性的に未熟な綾を絶頂へと導いた。変な薬やローターのせいもあつただろうが、それでも初めての経験だったのだ。

(しかも、あんな場所で……電車の中でだなんて)

行きすぎた痴漢行為。

上手く逃げ出せたから良かったようなものの、あのまま駅に着かなかつたらどうなつていたのだろうか。

考えれば考えるほど深みにはまつていく。だから考えないようにしようと思つても、ヴァギナの熱さが思考を途絶えさせはしなかつた。

「……もう一回、ぬぐつてこよう」

トイレに立つ。

穿くものを探してカバンを漁っていると、唐突に部屋の戸が開かれた。

「おお、本命の巨乳ちゃん、はっけくん♪」

そこにいたのは、電車の中で痴漢を働いてきた少年だった。

「え？ な、なんで！？ どういう……んんっ！？」

あまりのことに綾はただうろたえるだけで、叫ぶことも逃げ出すこともできなかつた。

少年は手慣れた様子で歩み寄り、すぐに口をふさぎにかか

る。
（なに！？ いったいなにが起きてるの！？ なんでこの人たちがここに！？）

夢でも見ているのだろうか。電車内での行為のことばかり考えていたから、無意識にその続きを求めてしまったのだろうか。

いや、そんなはずはない。押さえ込まれた口の苦しきも、少年たちの薄笑いも、今 起きている現実だった。

「んぐっ……っく！ はっ、放して！ 人を呼びます！！」
「だからさ、呼んだってどうせ誰も来やしないうって」

「他の女の人は、今頃い〜い気分でおねんねしちゃってるだろうからさ」

少年の下卑た笑いが示すものを、綾は悟ることができなかつた。なにを言ってるのか分からない、というように首をか

しげると、少年たちはぶつと吹き出す。

そして親切にも説明してやろう、そう息を吸った瞬間、違う声が室内に響いた。

「よお、この部屋だったんだな」

「グッドタイミング。ちようど捕まえたところだよ」

部屋の入り口に、別の少年たちが立っていた。

そのうちの1人は、電車内で見えた少年だった。これで少年は4人。電車内で会った少年2人と、それぞれが連れてきたもう1人ずつの少年。

（なにこれ？ なんなの？ どうなってるの！？）

4人の少年に取り囲まれ、綾はまた現実を見失った。そしてあつという間に後ろ手に縛られ、布団の上に座らされる。果然とする綾を、少年たちは車座に囲った。

「この合宿所にいた女の人は、もう俺たちがヤっちゃったから。しばらく目を覚まさないと思うよ？」

「あれ、なんだ。お前らもヤってきたの？ 俺らも別の女、いただいできたぜ」

「へえ、他にもいたんだ。そっちはどうだったよ」

へえ
これが本命ちゃんか
確かにたまらない
感じだな

だろ？
それに、感度もいいんだぜ
痴漢されてんのに
イっちゃったしな

パンツ脱いでるなんて
俺たちが来ること
期待してた？

さっきの人より美人だな
断然気に入っちゃったよ



「ショートのかなかない女だったぜ。便所に押し込んで、無理矢理犯してやったよ。」

「くははっ、便所かよ。俺らなんか、風呂上がりをごちになったから、超きれいだっただぜ。でも、気の強い姉ちゃんできちよと手こずっちゃまったよ」

「でも、俺とこいつでま○ことアナルにダブル射精してやったからな。最後はもつとちよーだいつて喘ぎまくってたぜ」
「ま、そんなワケでさ。他の人たちは全員アクメでおねんねつてとこ。どんな叫んだって、誰も来やしないって」
「むしろ叫んでくれよ。その方が強姦してらって気になるじやん？」

綾を囲んでゲラゲラと笑う。その目に、声に、下卑た好色さがにじみ出ている。

（ショートの……って西野さん？ 気の強いのって北大路さん？ 犯した……妊娠した？ それって、まさか、そういうことなの？）

電車の中では、触られただけだった。でも、逃げ出していなければ……

いや、結局逃げ切れていなかったのだ。現に、少年たちは今ここにいます。

「ははは、そう怖がるなよ。ちやーんと気持ちよくしてあげるからさあ」

「そうそう。自分から、おち○ぼ突っ込んでくって言えるようにしてあげるって」

「いやあああああああああああああああー！」

また口を押さえ込まれた。

そして、寄つてたかつて綾のシャツを脱がしにかかる。ずり上げたシャツの下は、すぐに素肌。綾は寝るときにブラをしない方だった。

「パンツは脱いでるし、ブラはしてないし。やつぱり襲ってもらいたかったんだな」

「デカイだけじゃないぜ。形もいいし、張りもあつて最高だよ」

前後左右から手が伸びてきた。

正面に座った少年が、下から持ち上げるように全体を揉み上げる。左右の少年たちは、それぞれの先端、乳首をつまんだ。背後から口を押さえている少年は胸の谷間に手を伸ばし、両の乳房に挟まるようにして楽しんでいった。



こんなに大勢に胸を触られるなんて

んっ!!

ぐっぐっ

ギョッ

気持ちよさはなかった。ただ恐怖と嫌悪が湧き上がり、息苦しさがそれを助長する。

少年たちもまだ綾を感じさせようとは思っていないらしく、まるでおやつでも奪い合うかのように乳房を奪い合った。右の少年が驚掴みにしてくる。すると左の少年は乳首に吸い付いてきた。

正面の少年も負けじと片方の乳首に吸い付くと、背後の少年がそのおでこを叩き付けて引きはがし、指先で乳首をつねり上げる。

(こんなことって……こんなことってないよお！)

しかし乱暴に奪い合っているようでも、あまり痛みは覚えなかった。

少年たちは、女体を弄ることに慣れているのだろう。つねるにしても、痛みを覚えるか覚えなにかギリギリのところを力を抑えているようだった。

揉んだり掴んだりするのも同じで、無茶はしない。むしろ気持ちよくなれるようにと、甘い手触りで迫ってくる。そして時折、力を入れてくるのだ。その緩急の付け方には、年々さえ感じられた。

少年たちの乳房への執着はより密度を増していた。背後から抱き締められるかのように乳房を揉み上げられ、

両の尖端にはそれぞれ少年たちが食らいついている。

揉み上げられる感覚と吸い付かれる感覚がまったく違うことが、逆に不可思議な調和を生んでいた。それとも、4人が共同作業に慣れているだけなのだろうか。

綾の口からは、喘ぎだけが漏れている。叫ぼうとすればすぐに口を押さえられてしまうのだ。しかし少年たちは、喘ぎの悲鳴だけは押さえ込まずに聞き惚れる。

「も、もうやめて……許して、お願い」

「なにを許すのさ？ 俺たち、お姉さんをいじめたりなんかしてないよね？」

「気持ちいいだろ？ 全然ひどくなんてないじゃないか」

薄笑いを浮かべる少年たち。なにを言ってもものれんに腕押しでしかない。

やはり電車の時と同じように、自力で逃げ出すしかないのだ。しかし、今度は4人相手。しかも腕は縛られたまま。

(どうしよう。どうしたらいいの？ 助けて、真中くん！)

心の中でいくら叫んでも、誰の耳にも届きはしない。

改めて、自分は1人なのだと察してしまふ。それは、追い詰められた小動物のような心細さだった。

苦悶する綾など歯牙にもかけず、少年たちは女体をむさぼっていた。

いつの間にか押し倒され、脚まで押さえつけられている。そして乳房のみならず、太ももや腹まで撫で回されていた。

「んっ、んんっ！ くすぐりたい……っく、やめっ、んあああっ！」

胸を揉まれても違和感しか覚えなかったが、腹や脇腹は明確にこそばゆさを感じた。

太ももの方は撫でられてもかゆくなくなるような感じがする。それがゾワゾワとした悪寒を生み出し、背筋を通って口へと伝わる。絞り出されたのは、喘ぎだった。

「感じやすいなあ、お姉さん。敏感なのって可愛いよ」

少年たちは全身をくまなく撫で回した。

それでも暗黙の了解があるのか、股間にだけはまだ手を触れない。しかし綾にはそれを助かったなどと思う余裕はない。こそばゆさや悪寒に耐えるだけで精一杯なのだ。

それに、少年たちは情けをかけているわけではない。メイデイツシユはあとに取っておく。ただ、それだけのことだった。

「んんん。乳首、コリコリしてていい感触〜」

身体中撫で回していてもやはり、興味を中心は乳房にあるらしい。屹立した乳首に舌を這わし、舐め回す。時に吸い付き、まるで赤子のようにしゃぶりまわした。

もちろんそれだけでは飽きたらず、唇や歯で甘噛みする。プリプリとした食感を楽しむ少年たちから、楽しげな声が漏れだしていた。

「やっぱオツパイって最高だよな。俺、マ○コよりこっちの方が好きかも」

「なに言ってるんだよ、やっぱま○こだろ。おっぱいじゃ、射精の楽しみがないじゃんか」

「バカだなお前。オツパイでだってそれくらいできるっての」

綾にとって、もはや少年たちの言葉は異国の言葉にさえ聞こえていた。

理解できないのだ。彼らがなにを話し、なにについて笑っているのかを。

だから、少年が1人ズボンを降ろし、その怒張したペニスを見せつけてきても、一瞬なにが起きたのか分からなかった。



さわ
さわ

あう!!

ああ!!

し、なにをされるのかも理解できなかった。

「え……？ な、なに！？ なにするの！？」

「パイズリだよ。見れば分かるだろ？」

分かるはずがない。綾はまだ処女なのだ。

乳房にいきり立った男根を挟んだところで、少年がなにをしたのかなど分かるはずがない。綾はただ、胸元にペニスの熱さを感じるだけ。そもそも、勃起したモノを見るのをはじめてだった。

（分からない。この人たち何を！？）

ペニスはビクンビクンと脈打っていた。しかし、直視などできない。綾は目をつむり、少年の行為をじっと耐える。

すると少年は小瓶を取り出し、その中身を自分のペニスと綾の胸元へと垂らした。

「媚薬入りのローションだよ。電車の中でマ○コに塗ったやつより効き目は軽いけどさ」

不思議そうな顔をしていただろうか。少年はにやけながら説明した。

そして乳房を両脇から押さえ込み、ペニスを胸の中心にさせる。するとペニスはほぼ完全に乳房の中に収まった。

少年はにやりとして、じゃあ、とささやきかける。

綾の答えは聞かないまま、腰を前後に揺すり出した。

「え！？ な、なにこれ！ なにしてるの！？」

「くくく！ やっぱデカパイにはこれだよな、これっ！」

パイズリ。乳房でペニスを挟み込み、まるで膣へと挿入するかのように動く愛撫のひとつ。もはや説明は不要だった。いくら性的なことに疎い綾でも、少年がなにをしているのかは理解できる。

「い……いやあ！ やめてっ、そんなことしないでえ！」

「おお。いい声になってきたじゃないか。そうでなくちゃ、強姦の醍醐味ってもんがないよな」

もちろん少年にやめる気などさらさらない。

逃れようにも腕は縛られて押し倒された状態。脚は別の少年が押さえ込み、太ももを撫で回してはいやらしい笑みを浮かべている。

脚を押さえている少年たちが、たまたに陰毛をつまむところがまた凄まじい不快感だった。



胸を激しくもてあそばされ、股間を好きなように眺め弄られている。こんな屈辱が他にあるだろうか。

綾はようやく自分の置かれた立場を、真剣に恐怖し始めていた。

「熱い……いっ、いや。やめてっ！　こんなことやめてっ！」

乳房にペニスが擦りつけられる感覚は、想像以上に不快なものだった。

ローションのおかげで滑りが良くなっているのはいいが、綾自身は異物を擦りつけられているという以外の感覚はまったくない。いや、なかった、という方が正しいか。

最初はただ熱いだけだった。摩擦熱を感じるのがまた気持ち悪かった。

そのはずなのに、徐々に不思議な感覚が生まれてくる。その熱さに、やたらと胸が高鳴っていくのが分かった。

（そういえば、媚薬入りって言ってた……媚薬って、確か……！）

なるほど。電車でヴァギナに塗られたものも媚薬だったというわけだ。

そして今、ただ摩擦熱しか起きないはずの行為に胸を高鳴

らせているのも、媚薬のせいなのだ。だからバイズリなんかで気持ちよくなっているんじゃない。綾は自分にそう言い聞かせた。

言い聞かせるしか、この快感の意味を理解できなかった。

「はあ、はあ……いいよコレ。たまらないよ！　すぐにぶっかけてやるからな」

少年はただ乳房を押さえるだけでなく、乳首をつまみ、揉み込みながらバイズリを楽しんでいた。

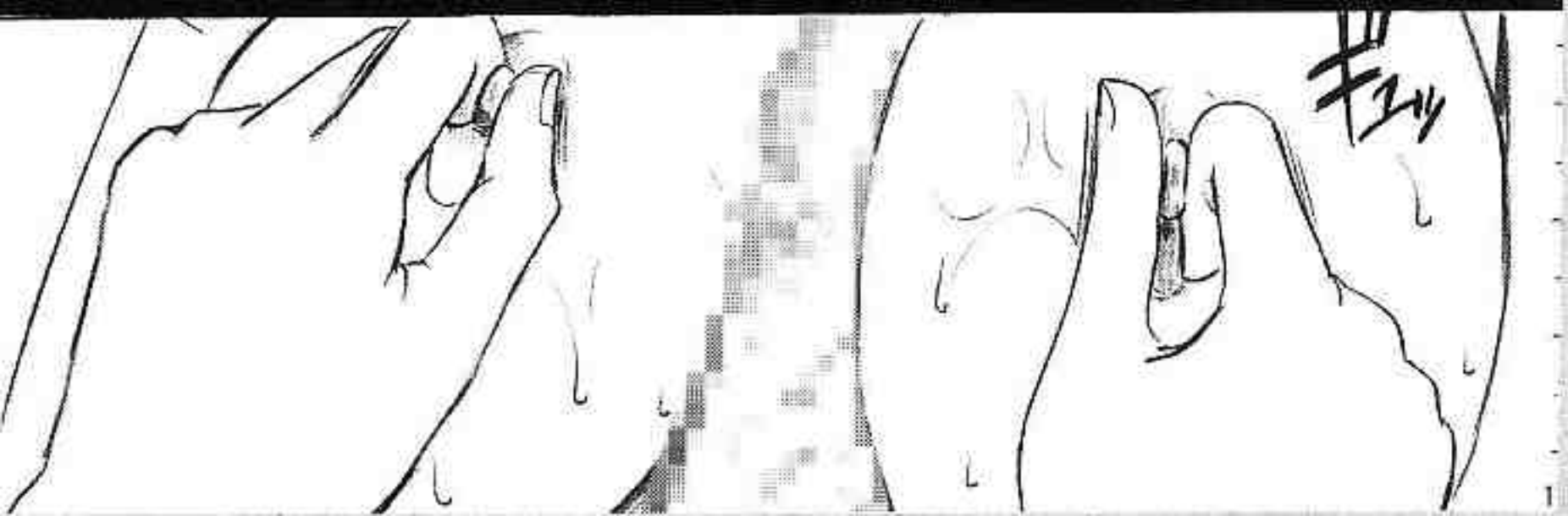
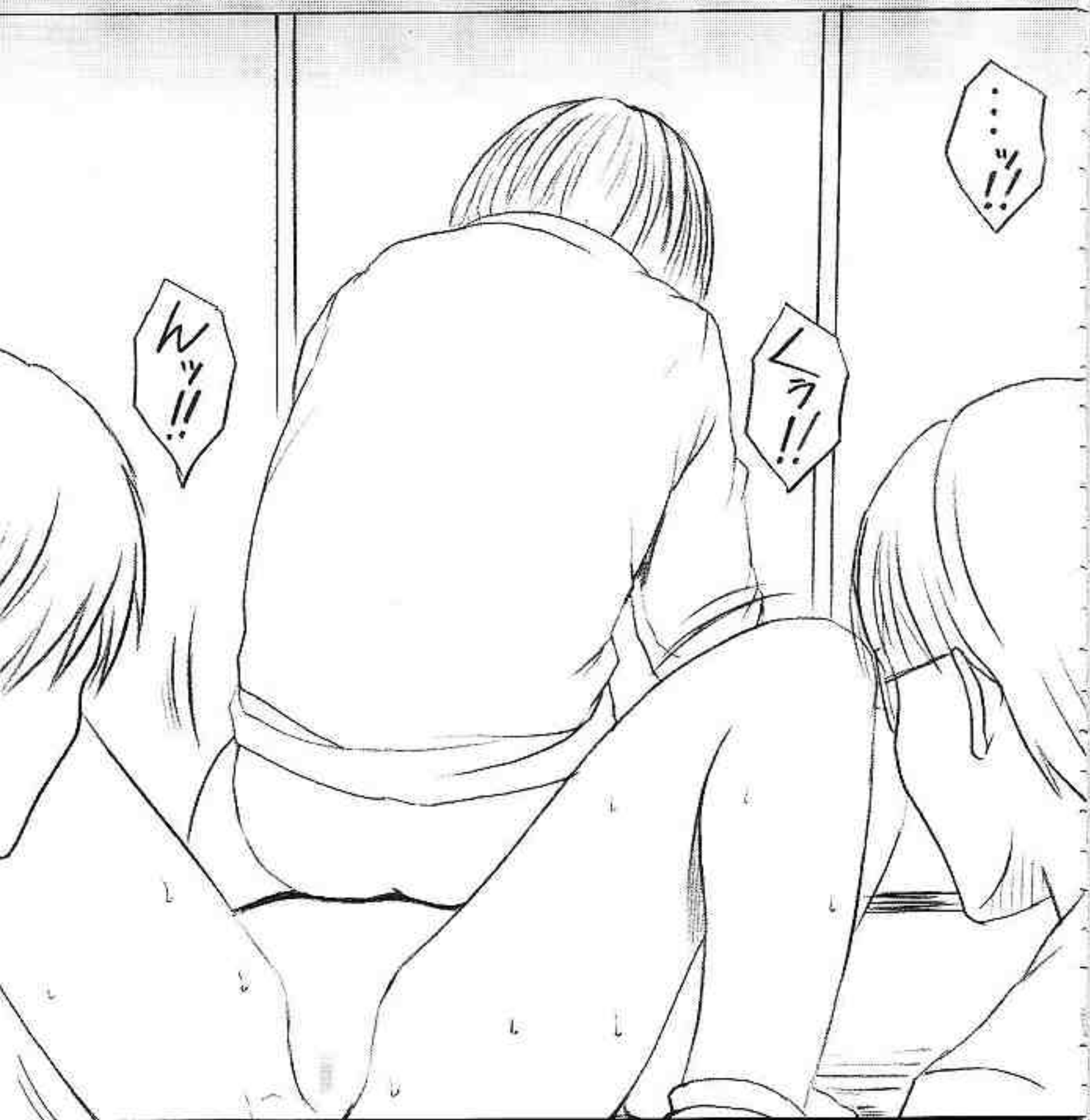
擦られるペニスからの快感よりも、乳首を弄られていることに強い刺激を得る。

乳房全体に揉み込まれたローションの感触も、快感を生み出す要因になっているのだろう。ネットついた感覚というのは、不快感を通り越してしまえば楽しい感触になるものだ。

「ああ、いや……こんなのいや。あたし、なにかおかしくなっちゃってる……ううう！」

「なに言ってるんだ。まだまだこれからだぜ？　もっとおかしくしてやるから、もっともっと楽しんでくれよ！」

サディステイックな笑みを浮かべ、乳首をつねる。ギリギリの痛みが刺激になって、綾は腰を跳ね上げた。



「うわ、すげえ。マ○汁飛び散ったぜ!？」

「え!？ なつ、なに言つて……つくう!！」

胸にのしかかられていて下半身が見えなかったが、そういえば股間は他の少年たちの目にさらされていたのだ。

パイズリばかりに気を取られていて、他の羞恥を忘れてしまつていたことに深い後悔を覚える綾。しかし、股間に気を取られれば今度は乳房をいたぶられる。

どこにも逃げ道がない。自分の身体のありとあらゆる部分が少年たちのオモチャになつてゐる。

綾は気が狂つてしまいそんな絶望に襲われた。

「助けて! 助けて真中くん……真中くん……!」

「まなかク……ンだつてさ、あははっ!」

「誰それ? 姉ちゃんのカレン? でも残念でした! 今日、お姉さんが啞え込むおち○ほは、俺らのでーす」

「まなかクンには、また今度可愛がつてもらいなよ。今日は俺たちが、身体の隅々まで可愛がつてあげるからさあつ」

「怖い怖い怖い! 助けてっ、真中くん、誰か……助けてっ!」

恐怖でガタガタと震え出す身体。しかし全身を押さえつけられていて、その震えさえも満足にあらわせない。

少年たちはそんな綾に嗜虐心をそそられたのか、身体中をペッティングしまくる。

それだけでは満足できなくなったのか、更に1人がズボンをおろし、屹立したペニスを取り出した。

「ん……姉ちゃんほつべ、柔らかいなあ」

少年はそのペニスを綾の頬に擦りつけた。すぐに頬のみならず、唇や額、顔中のあちこちに擦りつけてくる。

ペニス独特の匂いをはじめて嗅ぐ綾は、不意に吐き気さえもよおしてしまった。

「あれれ? これくらいでまいられても困っちゃうなあ? あとで、たつぷりと舐めてもらうんだからさ」

「な、舐める? なにを……まさかつ、まさかソレ……っ!」

「そうそう。おち○ち○を、この可愛いお口でしゃぶつてもらうんだよ……」

押し付けられるペニスを振り払うかのように、顔を揺さぶる綾。髪が振り乱れ、綺麗な黒髪が乱雑になつていく。

その乱れつぶりに興奮したのか、パイズリをしていた少年が、他の少年に声をかける。

「おい。顔を押しさえててくれよ……もう、ぶっかけたくてしようがねえんだ」

オーケー、と楽しそうな声をあげる少年に、頭を押しさえてられる。

そして綾は、息を呑む瞬間すら与えられなかった。

「……………え？」

真っ白い粘液が、顔中に降りかかった。

それは、胸に挟まったペニスの先端から噴き出したもの。

(なにこれ？ あったかい……ネバネバしてて、すごく、臭い……精、液？)

胸の中にあるペニスが激しく脈打っていた。

脈打つ度に、先端から白濁液が溢れ出る。

「くっは………出たああ……」

名残を惜しむかのように、何度か腰を振る少年。

そのペニスは赤黒く怒張しており、精液の白さとは対照的に見えた。

「ぎやはは！ すぎえ、出し過ぎだよお前！」

「ばーか。このために、さっきの別の女には射精してやらなかったんだっての」

パイズリの少年も、脚を押しさえていた少年ももう綾の身体から降りていた。少しだけ自由を取り戻した身体をくねらせ、顔についた白濁を布団に擦りつけて落とす。

「ああ……た、たすけて……もうやめ……」

「いいよ？ 俺をフェラでイかせてくれたら、考えてあげてもいい」

そしてまた、少年は答えを聞かずに行為に走る。

もつとも、ペニスを咥えさせられてしまっただけは、答えることもできないのだが。

「んぶっ、う、っ！ んううう……んぶっ、じゅぶっ！」

「ほらほら。しっかりと気持ちよくしてよね？ ぜったいに噛んだら駄目だよ？ もつと口をすぼめて、ち○ぽを吸うようにするんだよ」

そう言われても、それでは歯が当たってしまいかねない。

すべてが恐怖心に結びついていく中で、綾は必死に言われたとおりにする。

そんな綾の態度を見て、少年は満足げに笑った。

掴んでいた髪は放し、代わりに側頭に手を添える。耳や頬までを撫でるようにしながら、ペニスをゆっくりと口腔へねじ込んだ。

「んぶっ！ う、っ……んううう、う、っ！」

「んん。ぎこちないけど、そこがまたソソるね。ほら、もつと舌を動かして、ち○ぽをしゃぶるんだよ」

咽頭を突き刺すペニス。その苦しさに、涙がこぼれ落ちた。

しかし咳き込むこともままならず、言われたとおりに舐め直す。

（なんであたしがこんなコトしなくちゃいけないの？ なんでこんな目に遭わなくっちゃいけないの！？）

苦し紛れに、とにかく舌を暴れさせる。それが気持ちいいのか、少年は歓喜の悲鳴をあげていた。

しかし綾はまったく気持ちよくはない。舌に触るペニスの感触は不気味以外の何ものでもなく、その味は嘔吐感をもよおすだけ。先ほどのパイズリでさえ少しは官能を覚えたとい

うのに、フェラチオは苦しいだけの拷問でしかなかった。

「おおお、いいっ、いいよ！ 来るっ、来るうううう！！」

「……っっっ！！」

少年が、頭を突きえつけてきた。腰の動きを早め、ペニスを激しく出し入れする。

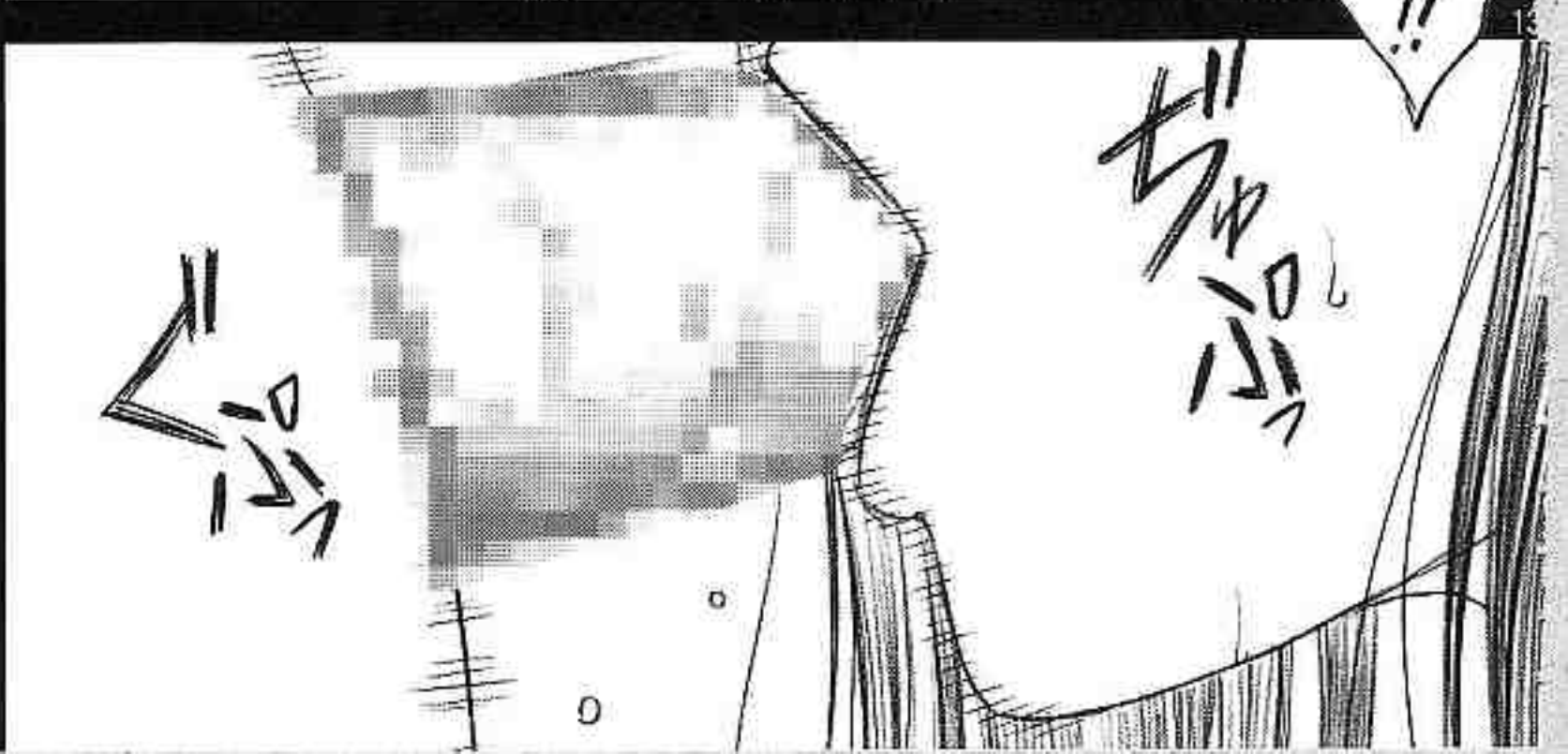
この状態は、先ほどのパイズリと同じ。つまり、射精が近いと言うこと。

（フェラでイかせてくれたらって言うてた……それってまさか、あたしの口の中に射精するってこと？）

今になって、ことの重大さを思い出す綾。ちよつと口に入っただけで絶望的な嫌悪感を覚えた精液を、残らず口内に出そうとしている。

しかしそうすれば、もうこんなコトはしないと断っていた。いや、考えると断っただけで、やめるなどとは一言も言っていないのだが、今の綾にはほんの小さな期待にでもすがりたい。かない。

そんなことを考えている間にも、少年の動きは激しくなる一方。口内で暴れ回るペニスは、もはや人の肉体とは思えないものになっていた。



「出るっ、出るよ！ 全部飲み干してくれよなっ！ ああ、ああああああっ！」

ズンツ、と叩き付けるように押し込まれた。

喉の奥に亀頭が入り込み、息苦しきで一瞬意識を飛ばす。

ドクンドクンドクンツッ！！

そのまま、喉に精液を直接流し込まれた。

衝撃的な感触に、飛びそうになった意識が戻ってくる。しかし、意識など戻らねば良かったとすぐに痛感した。少年は少し腰を引き、2撃目を口内に噴き出した。

「おおおおおおお！！ いった、いいぞおおお！！」

綾は頭を押さえつけられ、逃げることも叶わず、口内に大量の精液を噴き出される。

上あごを直撃したそれが、鼻腔にまでこびり付いたらしい。鼻の奥からツンとした異臭が流れ込み、否応なく肺腑にまで染み渡る。

少年は何度も何度も射精する気なのか、小刻みに腰を動かして続いていた。そのせいで口を閉じることができず、また

精液を溢れさせる。

「くはくはっ！ 口内射精って最高気持ちいいよなあ……つと。おやおや？ 垂らしちゃ駄目でしょ。全部飲んでくれないとくはっ！」

ペニスを引き抜かれた。そして少年が綾と目を合わせてくる。

「残さず飲んでくれないんじや、さっきの約束はナシだよね？ おつと。せめて今、口の中にあるものくらいは、全部飲んでくれないとっ！」

吐き戻しそうになったのを悟ったのか、少年が口を押さえ込んできた。

綾は迫り上がってきた胃液を押し戻すかのように、無理矢理精液を飲み下す。

「……っつっ！！ くはっ、くはっ……くはっくはっ！！」

咳き込んで倒れた綾を、少年たちが見下すように取り囲む。

「あーあ、無茶しやがって。お姉さん、苦しんでるじゃん」



んんッ!

んんッ!

「ははは。あんまりにも良かったからさ。お前も試してみなよ、この口。素人とは思えない舌さばきだよ？」

「待って待って。お前らときたら、女の扱い方が分かってないんじゃないの？」

落ち着いた感じの少年が、ぐったりとした綾の股を開かせ。理性が飛びそうになっている綾は、もはやされるがままの状態だった。

(……早く……終わって……)

夢なら冷めて欲しい。現実なら早く終わって欲しい。

いや、現実だなどと認めたくなかった。はじめてのセックスが、こんな形になるだなんて考えたことすらなかった。

恋した人との、嬉しいセックス。映画の中にあるような、汚いところなどない、ただひたすら美しい愛の営みがセックスなのだと思っていた。

「さて、一休みして息も整ったでしょ。今度は、俺たちがお姉さんを気持ちよくしてあげるよ」

まだ射精していない2人が、元気よくそそり立ったペニスを見せつけてきた。

すぐに挿入するような無粋な真似はしないらしく、少年たちははまたも愛撫を始めた。その手はようやく股間へと延び、遠慮無くまさぐる。気持ちの上では不快や絶望を覚えている綾も、肉体の方は違う反応を示していた。

股間はすでに愛液でしとどに濡れそぼり、クリトリスの包皮も剥けて薄桃色の粘膜真珠を見せている。

「へえ、お姉さんのま〇こ、びらびらが少ない方だね。綺麗なんじゃない？」

小陰唇をつまみ、引っ張る。真っ赤に充血した谷間が開かれ、他の少年たちが感嘆の吐息を漏らした。

もちろんそんなことが喜びに繋がるはずもない。綾はただ見せ物になっている自分を恥じ、苦悩に身をくねらせるだけ。少年たちはそれが悦びの悶えなのだ、勝手に解釈をして、女陰を弄る手に力を込める。

1人が陰唇のヒダを引っ張ると、逆側から伸びた指がクリトリスをつまむ。強い刺激で綾が飛び跳ねるのを見た最初の少年も、負けじと瞳口をほじくり回した。

にゅぷにゅぷと音をたてる膣口は、じわじわとした快感の元となっている。クリトリスの刺激は鮮烈で、声を出さないようにと我慢すればするほど体を跳ね上がらせた。

ああーあつー駄目っ！
そこ……ああ……

えー？
どこの……

はじきり
言ってくれないと
分からないよ？

そんなに弄らないで
ください……あつ……っ！

あつ
あつ
あつ

あつ

あつ

乳房も地道にもてあそばれ続けていて、背筋をゾワゾワと震えさせる官能を湧き上がらせている。乳首をつままれると、クリトリスと同じような鋭い刺激が走った。

(駄目……言えるわけない。おま○ことか、クリトリスとか、言っちゃったら、絶対にもっと弄られるに決まってるもの！)

少年たちの指戯は、統率があるようでなかった。

1人が膣口を弄っているのに、もう1人も同じ場所へと無理に潜り込んでこようとする。それが怖くて息を呑むと、1人はクリトリスに戻って愛撫を楽しんだ。

すると今度はクリトリスを奪い合うように指を擦りつけてくる。ちよつと乱暴な感じになったり、息をそろえて撫で回したりしてくるのだ。

次になにをされるのか分からないという不安がスパイスとなつて、官能をいるどつていく。様々な味付けで体を料理され続けていると、次第に理性が薄れていくのが分かる。もう心でしか抵抗できないのに、その心が弱くなつていくのだ。綾の口から喘ぎが漏れてしまうのも、仕方のないことだった。

「ほら、ねえ。言っちゃいなよ？ どこが気持ちいいの？ どうしてもらいたい？」

「うう……や、やめてください。もうこれ以上、なにも……」

股間を弄っていた2人に、お尻を高く持ち上げられる。そして両サイドから脚を抱え込まれ、股間をぱっくりと開いたままの体勢で固定された。

「あああつ！？ や、やめてっ……苦しい、んんっ！」

「うひょー！ おま○こ丸見え！」

「もうぱっくり割れて、膣口も開いちやつてるじゃん」

「ケツの穴まで丸見えだよ。ヒクヒクしてて可愛いよね」

どこまでの辱めを受ければ、この行為は終わるのだろうか。息苦しさで羞恥で顔を真っ赤に染める綾に、少年たちはまるでエロ本を眺めるかのように現実味のない視線を送った。

(そうだ。あたしは、人間扱ひされてないんだ……この人たちのオモチヤ。女の体っていう、性的なオモチヤでしかないんだ)

理性にひびが入った。人間的な感情が剥がれ落ち、ケダモノのように本能だけが表面に浮き上がる。性的な本能が鎌首をもたげ、綾の心を食い荒らしていく。



少年たちはそれを知ってか知らずか、ひたすら官能を与えることに専念していた。

さきほどより弄りやすくなった股間に、少年たちの指が殺到する。我先にクリトリスを、膣口を弄り回す。陰唇をつまんで引つ張ったり、割れ目を擦りつけて尿道口まで撫でつけた。

「もうグチヨグチヨだよ。お姉さん、濡らしすぎだね」

「お姉さんの愛液、いい匂いがする……それに、美味しいよ」

少年は愛液を味わいたくなつたのか、女陰を直接舐め始めた。

指よりも熱く柔らかい舌に舐め回されて、綾も思わず悶えてしまう。ねっとりとしたその感触に、指とは違う優しい快楽を覚えてしまった。

舌はまず膣口のアたりをほじくる。愛液をすすりながらのクンニに、綾は魂まで吸われてしまうような気になつた。

ジュルジュルと汚らしい音が耳に聞こえるだけでなく、股間から直接身体中に響き渡る。少年はわざと音をたてているのだらう。股間からだけではなく、耳からも犯そうというのだ。そして、すすり上げた愛液を、盛大に嚙下する。

「あうっ！　そ、そこはっ、あっ……駄目っ、強く吸いすぎ

ないでっ！」

しかし少年は聞く耳を持っていなかった。それどころか更に強くバキュームし、クリトリスを完全に剥き出させる。

男根のようにそそり立った陰核を見て、少年は歓喜に打ち震えた。

そしてまたしゃぶりつく。よく乳首にするように、吸い付いては甘噛みしてそのまま押し潰すようにしてから口を離れた。

次は舌で転がすが、またすぐに吸い付く。それを何度か繰り返していると、薄桃色だったクリトリスは真っ赤に膨れ上がる。気がつけば、最初の倍のサイズくらいにまで膨れ上がっており、それがまた男根の勃起を思わせた。

「すげえよ、もうクリトリスもパンパンに膨れてるぜ」

「もう指でつまんで引つ張れるんじゃないの？　試してみろよ」

そしてつままれる。

快感なのか痛みなのか分からない刺激が脳天を突き刺した。悲鳴もあがっただろうが、綾自身はもうなにを叫んでいるのか自分で理解できていない。もともと、意味のある言葉などは叫んでいないだらう。ただひたすら、官能を表現する



だけの声が溢れ出しているだけだった。

身体が派手に跳ね上がり、体勢を崩してしまふ。

少年たちも無理強いをさせず、綾の身体が感じるままにさせていた。

（壊れちゃう壊れちゃう壊れちゃう！ おま○こが、身体が、心も、もう！）

少年の指が膣へと潜り込み、まるでそこから持ち上げられているかのような状態になっている。あまり深く突き込まず、浅いところをこねくり回す少年は、まるで綾の身体を楽器かにかと思っっているようだった。

膣へと潜り込ませた指を振るわせる。それはギターをつま弾くかのような動きで、綾の口から止めどない喘ぎを奏でさせた。

「色っぽい声だよな。そろそろいきそうなんじゃない？」
「もつとマ○コの中グチャグチャにしてやれよ。1回イけば、もつと素直になるんじゃないやね？」

言われるまでもない、とばかりに少年が膣内をほじくり回す。

綾の方も、なにを言われるまでもなく絶頂に向かって駆け

上っていた。

（また来る。大きいの来ちゃう！ ここでイカされちゃうたら、あたしいったいどうなっちゃうの！？）

パイズリやフェラでは、綾自身はあまり気持ちよくなかった。ただ犯されているという恐怖が心身を支配して、絶望に身を固めるだけだった。

しかし少年たちの愛撫は官能を燃えたぎらせ、的確に頂点へと導いていく。電車の中でもそうだった。まだ性的に未熟なはずの綾を、瞬く間にイかせてしまったのだ。

人数が倍になり、乳房と股間だけではなく身体全体を愛撫されれば、絶頂になど簡単に連れて行かれる。そして、イカされてしまえば、心はともかく身体が抵抗できなくなる。それを、少年たちは待っていた。

「いやっ、あああ、いやあああ！ イきたくない、イきたくないのっ！」

「遠慮するなって。思いつきりイっちゃえばいいよ、ほら、ほらっ！」

「あああああ、いつ、いやっ！ ひあああああああああああああ！！！」



指の動きが早まった。

少し乱暴かとも思えるほどの膣内愛撫は、綾にとって凄まじい快楽の泉となる。むしろ、時折深く潜り込む指の痛みが鮮烈な刺激となり、全身に電撃を走らせた。

もうこれ以上は上がらないというほど腰を跳ね上げエビ反りする綾を、少年たちは好奇の目で見つめ、喝采を浴びせる。

「ほら！ イっちゃいなっ！」

「あ……— ツツツ……！」

ピンツと身体が硬直した。

同時に、愛液が塊となって噴き出す。

一度、二度、そして三度。

あまりに跳ね上がるので、少年たちが綾の身体を押さえつけた。それでもなお跳ね、愛液を噴射する。

「すげえ、潮噴いてる！ 俺、はじめて見たよ！」

「この姉ちゃん、処女のクセに潮噴きかよ。とんだ淫乱なんじゃねえ？」

綾はもう、そんなことはどうでも良かった。

絶頂の波が、繰り返し繰り返し訪れては、体と心を痺れさ

せる。

あまりの絶頂感に、意識を保つことさえ難しかった。気持ちいいという感情すら忘れ、ただ真の白になった。

三度、四度の絶頂で、ようやく快感が戻ってくる。

五度目の潮噴きは威力も弱まり、単に膣から溢れるだけの愛液の滝となった。

（イった……イかされた……もう駄目だ。あたし、もう逆らえない……）

それは駄目だと、心の中のなにかが叫ぶ。

（だって、もう駄目なの。絶頂しちゃったんだもの……悔しいけど、もてあそばれて気持ちよくなっちゃったんだもの）

興奮が湧き上がる。

官能が燃え盛る。

（ああ……イヤなのに。こんなコト、許したくないのに……でも）

でも、もう抵抗できない。

身体がセックスしたがってる。

心はまだ、ほんの少しだけ抵抗できるかもしれないけれど。



「さて……それじゃあ、そろそろ本番タイムといこうか？」

そう言い放つ少年のペニスを見て、つい、興奮で息を呑んでしまう。アレを突っ込まれたらどれほど気持ちいいのだろうと考えてしまっている自分がいた。

「だ、だめ……やめて……おち○ち○は、だ、だめえ……」

「ははは！ もう、お姉さんの方から誘ってるようにしか聞こえないって」

割れ目に押し当てられた亀頭の熱さは、激しい官能を期待させた。

「ぐ……あつ……んっ、ああ、はっ、入るっ……！」

少しずつめり込んでくるペニスを感じながら、綾は絶望と官能を同時に味わっていた。

被虐的に叫ぶことでより深い絶望を味わい、それが官能へとフィードバックされていくのを身体が覚えていたのだ。だから、叫んでしまう。犯されているのだと、分かっているのに叫んでしまう。

指よりも太くそして深くめり込んでくるペニス。それが初めてセックスであると、誰あろう綾自身が一番よく分かっている。本来ならば、ここには別の男が入ってくるべきだったのだと。

たのだと。

絶頂を迎えていた身体は、見知らぬ男のペニスも悦んで受け入れてしまう。しかし唯々諾々と受け入れてしまうのは、少女の中にほんの少しだけ残っている潔癖さが許さなかった。

しかし、身体は正直だった。

一歩踏み込まれる度に快楽に震える膣壁。もっと奥まで来て欲しいとぜん動し、ペニスを熱く迎え入れる。

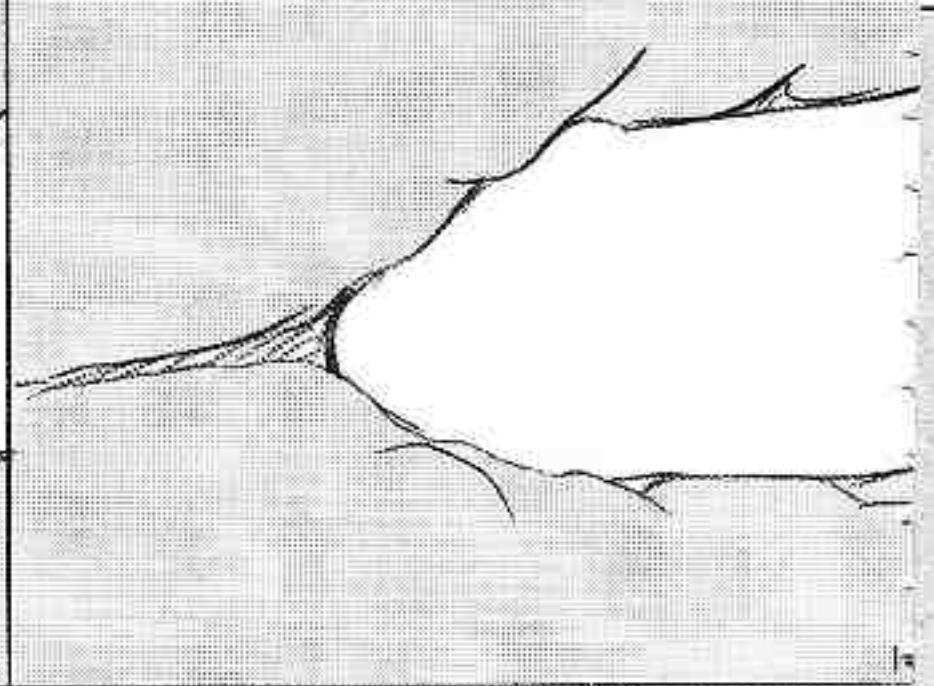
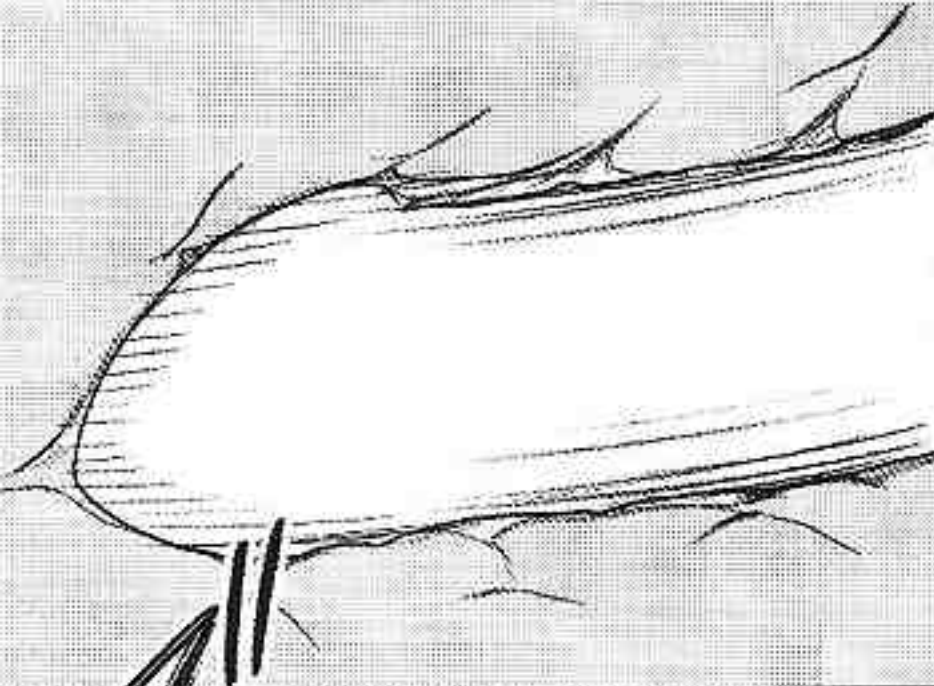
その証拠に、痛みはまったくと言っていいほどなかった。破瓜の痛みに震えるはずだった綾は、むしろ理性的に強姦を否定できるくらいだった。

「抜いて……おち○ち○、抜いてください！ ああ、これ以上奪わないで……っ！」

そんな言葉が少年をより興奮させるのを知っていた。

綾は何度も何度も懇願し、少年の嗜虐心をあおっていく。そして亀頭が子宮口を叩く。最奥まで貫通された膣道は、もはや快楽を生み出すだけの器官でしかなかった。持ち主である綾を悦ばせるだけの、粘膜の穴。

少年はその穴に、自らの官能器官を突き立てる。奥へと達したそれを引き戻し、また突き入れる。そうやって何度も何度も抽送し、自分と綾に快感を与え続ける。



「はあ、はあ、や、やべえ、やべえよ！ このマ○コ、気持ちよすぎるよっ！」

「だ、だめ……中で出しちゃダメエ……あああ」

誘うような言葉が漏れた。これでまた少年をあおる。

もちろん、本心でもある。膣内射精はまずい。間違っても妊娠してしまうわけにはいかないのだ。

それでも、綾は口ずさむ。

少年の龟头が子宮口にキスをしながら、濃厚な精液を噴き出すようにと。

「お願い、中だけでは出さないで……妊娠しちゃう。妊娠しちゃううう……っ！」

ふと、口内で射精されたときのことを思い出した。

勢いよく噴き出した精液が喉を打ったときの、あの官能。

この少年はどれほど臭い精液を出すのだろうか。どれほどの量を出すのだろうか。

そしてそれを膣内で受け止めたら、どれほどの快感に襲われるのだろうか。

「抜いて……これ以上……ああ、いや、ああ、ああああ！」

股間を殴られているかのような衝撃。恥骨同士がぶつかり

合い、激しい快感をもたらす。

少年はもう、ただのケダモノだった。理性などなにもなく、ただひたすら射精するためだけに腰を振り、膣を犯す。

その乱暴さも、今の綾にはひたむきさに思えた。自分を気持ちよくさせてくれるために、少年は腰を振っているのだと。膣内に精液を満たすために、官能を弾けさせているのだと。

「いつ、いくよ！ 中に出すよ！？ 出すよおお……！」

「だ、め……ああ、だめえ！ そんなコトされたら、あたし、随ちっちゃう……ううう……！」

ドクンツツ……

少年のペニスが、狭い膣内で弾け飛んだ。

本当に爆発したかのような衝撃が襲う。それが射精の感覚なのだ、綾はすぐさま理解した。

「んああああああああああ……！」

先ほどと同じように、頭の中が真っ白くなっていく。

今度は少年も身を固くして、ただ絶頂に弾け飛ぶ。

ピクンツツと痙攣する度に膣内に熱いものが満たされていく。それはもちろん精液だった。綾はその味を、膣内でも感じられるようになっていた。



（ああ、すごい……すごい！　こんなの、気持ちよすぎる、おかしくなる！）

知らぬ間に、少年を強く抱き締めていた。ビクビクと跳ね回る少年の身体が、やけに愛おしく感じられる。

「あ……ふ、んあ、ふあ……ああ……」

数度の痙攣のあと、激しい疲労感が襲ってきた。

それは少年も同じようで、ぐったりと綾にもたれかかる。綾は自分は犯されているのだという事実を思い出した。

（ダメよ。気持ちいいなんて言っちゃったら、もっと調子に乗ってくる）

どれほど調子に乗るのかと、考えただけで子宮がうずいた。もっともっと激しいセックスを求められるだろう。見知らぬ少年たちに輪姦されるという官能は、綾の身体にどれほどの衝撃をもたらすのだろうか。

「ちえっ……おいおい。最初っから中出しするなよ」

「まったく。それに、あとがつかえてるんだから、出したんならさっさとどけて」

へばった少年を無理矢理押しつけ、まだ射精してない最後の1人が綾を見下ろす。

綾はその目に獣性を感じて、絶頂したばかりだということに早くも欲求を覚えてしまった。

膣内を蹂躪して欲しいという欲求。それは、完全な墮落をあらわしていた。

絶頂の疲労感にさいなまれている身体を無理矢理起こされ、少年の股間をまたがされた。

痛々しいほどに膨張しているペニスを自らの股間にあてがい、そのまま腰を落とす。少年はケモノのようなうなり声をあげ、快感を訴えかけてくる。

綾もまた低く喘ぐが、恥ずかしさにそのまま声を呑み込んでしまう。

しばらく我慢して口を閉ざしていたが、けつきよく長くは持たず荒い息を吐き始める。

（ああ、これすごい。体重をかけると奥まで刺さって、突き上げられて揺さぶられるっ！）

「ちえ……こいつの精液で、ま○この中ぐちよぐちだよ」

愛液だけでなく精液も混じった水音はより粘性を増し、淫らな結合音を響かせる。そして突き込む度に膣道にある精液が押し出された。



ペニスによる快感は単に出し入れするだけでなく、射精によるところが大きい。その瞬間の跳ね具合や弾けつぶり、膣内を満たしていく温かい精液の感触。身体だけでなく、心までじんわりと満たされていくような官能があった。

（最初はあんなにイヤだったのに……あたし、もうこの人たちの奴隷になつてみたい）

奴隷どころか肉欲を満たすだけの人形でしかないのだが、今の綾にとつてはどうでもいいことだった。少年たちがなにを思おうと、自分も性的な快楽を得ているし、もつともつとそれが欲しいと思つてしまつている。

膣内にも濃厚な精液を注がれてしまつた。もう、後戻りはできない。

「くう……眺めも最高。こりや、あんま保ちそうにないなあ」

少年が胸にまで手を伸ばしてきた。

腰を跳ね上げながら、乳房に掴みかかる。下から持ち上げるようにして揉み込み、乳首もつまみ上げた。

手の動きと腰の動きが連動し、綾の性感にもリズムを与える。腰を突き上げられる度に乳首を引っ張られるのは、かなり心地好い律動だった。

「あふつ、くつ！ お、おっぱいが、ああ、おま〇こもお……んんんううつ！」

「ううううつ、締まる締まるっ！ 姉ちゃん、感じすぎだよ！」

そう言いながらも、少年は腰の動きを止めなかった。それどころか更に激しく突き上げてくる。

突き上げの瞬間に強く乳首をつままれると、全身に電気が走ったかのような官能が起きた。

少年の股間と擦れる土手。クリトリスももちろんだが、大陰唇全体で少年のペニスの根本を味わう綾。突き上げられて落ちた瞬間の激しさが、強引に犯されているのだという被虐性をくすぐっていた。

しかし実際には、そんなに高く跳ね上げられているわけではない。正常位で抽送されているときの方が、体内に出入りしている、という感覚は大きい。

この騎乗位は、出し入れの快感ではなく、ひたすら圧迫されている感じがあつた。亀頭はもう子宮口を叩きつばなしで、内臓のすべてが持ち上げられるような錯覚に襲われる。

あとはやはり、股間でクリトリスを押し込まれる感覚だ。指でつままれるときのような鮮烈さはないが、ぎゅつと押し潰される感覚は頭を痺れさせる。



(ああ……また、来る。エクスタシー来ちゃう……んんっ)

水を溜めた風船が一定の大きさを破裂するのと同じように、溜まった快樂も一定の昂ぶりで弾けるのだ。

「んあ、あっ……んあああああああああああああ
あ……」

「うわっ、うわっ、出る、出ちまうっ……」

同時に少年も破裂した。

また、臆内を熱いものが満たしていく。

(ああ、精液……この子のも、すごく熱い。すごく多い……
っっ……！)

少年の叫び声がまたすごかった。

両の乳首を痛いほどにつままれながら、何度も何度も腰を叩き付けられる。その痙攣の度に上がる少年の喘ぎが、綾には愛おしかった。

「はあ、はあ、やべっ……たまんねえ！ もう一発いくぜ！」

「え……っ？」

射精したばかりだというのに、少年がまた腰を跳ね上げた。綾も絶頂したばかりなので、なかなかにきつい。息も整っていないし、何よりも臆は痙攣したままだった。

「なに！？ なに言ってるんだよ。きつさと替われよ！」

「うるせえな。穴ならまだあるだろ、ほら！」

「え……ええ！？」

臆を犯す少年が、綾の尻肉を掻き分けて他の少年たちに見せつけた。

そこにあるのは、結合したままの臆と、排泄器官。

「ああ、そうか。それもいいな」

「え、ちよ、ちよっど？ なにする気なの？」

「は？ お姉さんのアヌスを犯すに決まってるじゃん。まあ、この際ケツ穴でもいいや」

「なっっ……？」

興奮しきっているのか、別の少年がいきり立って、ペニスを菊門へと押し付けてきた。

「ま、待って……？ そこはおち○ち○を入れるところじゃ……」

……

ああ
ああ
あッ
!



「大丈夫だつて。けっこう入るもんだから、さっ！」
「——ッツツッ！！！」

ゴリツと音がしたような気がした。

ペニスが肛門をこじ開けて侵入してきたのだ。括約筋が無
理矢理押し開かれた感覚が、そんな音を聞かせたのかもしれ
ない。

「あひっ！ ひや、はっ！ ひやめっ、あっ、ダメええええ
ええ！！！」

凄まじい圧迫感が綾を襲った。しかしそれは痛みではなく、
快樂に彩られたものだった。

膣への挿入感とはまるで違うが、体内にめり込んでくる感
覚はよく似ている。苦しさの中にある官能も似ていて、綾の
身体はすぐにアナルセックスを受け入れてしまった。

しかし快感の質もずいぶん違う。膣壁はペニスを上手く
包み込み、そこから官能を得るが、直腸の壁は少し隙間があ
った。膣口よりも肛門の方が締まるが、それ以外はゆるい。
膣と違って行き止まりもない腸内は、やはり膣の代用でしか
ないらしい。

「おおお……締まるうう……つくー！」

「おいおい、あんま無茶すんなよ……お姉さん、壊れちまう
ぜ？」

「平気さ。見ろよこのアヘアへした顔……なあ？ 気持ちい
いよな？」

「え？ そ、そんなこと……あああんっ！」

綾のあえぎ声を聞いて、それみると言わんばかりに嘲笑す
る少年。綾は急に恥ずかしくなって、うつむいて官能に耐え
た。

そんなことを気にもとめない少年は、肛門をこじ開け、腸
壁を擦りまくる。膣側の壁を擦られると、ペニス同士が中で
ぶつかっているのが分かった。それは激しい快樂をともない、
綾の口から淫らな言葉を吐き出させる。

「だっ、ダメだあ！」

「出るうううっ！！！」

まず、膣の方で破裂した。擦られすぎて熱くなった膣壁に、
ねっとりとした精液が滲んでいくのが分かる。

そしてすぐに直腸内でも爆発する。根本まで押し込んだペ
ニスから噴き出されたのは、やはり熱く濃厚な精液だった。
その熱さで背筋が温まる感じがする。その温かさがじわりと
全身に広がり、綾の官能も高みへと走らせる。



「あ、あたしも……あたしもいくつ、全部の穴に出されながらイっっちゃうううううう！」

ま○こも、お尻も、そして口の中までも精液まみれにしながら、綾も頂点に達した。

そこにはもう、セックスへの不安や恐怖もなければ、真中に対する想いのカケラも残ってはいない。ただひたすら官能を享受するだけ。

しかしあまりにも快感が強すぎて、綾はそのまま事切れるかのように意識を失った。

……

……

「あー……出したあ」

「はは、出し過ぎだろ。お前、けつきよく何発やったんだよ」
「4発目からはもう数えてねーや。お前だって、5回どころじゃないだろ」

「おい、カバンの中に学生証あったぜ。これ、もらっておこう」

「カメラもあるな。証拠写真残しておいて、また今度お願い

しようぜ」

「他の姉ちゃんたちもまだへばってんだろうから、そいつらの写真も撮りに戻るか」

「いい女が3人。こりゃあ、俺たちだけで楽しむのは悪いな」
「次はもっと夕チ連れてくるか。10人くらいまでなら余裕じゃね？」

「そうだな。イヤがっても、この写真で脅迫すれば済むことだし」

げらげらと笑いながら部屋をあとにする少年たち。

その部屋は一見静かで、1人の少女が布団の中で寝ているだけ。

その少女は、もうずいぶんと前に平常心や理性を手放してしまっただのだろう。時折寝言のように口から漏れるのは、卑猥な言葉と喘ぎだけ。

しかしその声が誰かに届くことはなかった……